一寸の小鬼にも魂あり

AK兄貴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴブリン縛りの不運な転生者の話

目次

初めてのゴブリンライフ ―― 1
小鬼は辛いよ ―― 9
傍観という罪 ―― 18
チュートリアルの終わり ―― 27
ＩＦ．ゴブリンミリオンガール ―― 38
異常（ぜんりょう）なゴブリン ―― 49
とある姉弟の話 ―― 58
とある群れの終わり ―― 66
レッドキャップ・ハンティング ―― 77
初遭遇（ファーストコンタクト）（大嘘） 86

初めてのゴブリンライフ

ゴブリン。この言葉を聞いて、四方世界に生きる善良な人々の殆どが”敵”と答える。

混沌の者にして最弱最低の怪物である小鬼は、最弱という名に反して多くの冒険者を殺し、生活を脅かすもっとも身近な人類の敵であるし、それは一点の曇りもない事実だ。

小鬼の存在しない世界を生きた”彼”の抱く印象も、差異はあれど概ね同じであり、駆除できるのならばした方がいい存在として考えていた。

しかし立場が変われば主張も変わるもの。現在の彼は、小鬼を生かしたいと考えている。

だって、死にたくないから。

そう、この物語における彼（しゅじんこう）は今現在、一介の小鬼であった。

「ＧＯＲＢ!!ＧＯＲＢ!!」

「あっ、いや！やめ、ぎゃあああ!!痛い痛い！やめてぇぇぇぇー!!」

辺境の森の奥、洞窟の奥では哀れで不運な村娘を主菜とした宴が行われていた。

この世界ではよくある話（テンプレート）だ。村がゴブリンに襲われ、娘が拐われ、小鬼の餌食になる。

そんな光景（お約束）に、ただひとつだけ異常なものがある。

「・・・ＧＯＲ」

好き勝手に女たちを楽しむ仲間に混ざらず、かといって奪い取った戦利品を漁ることもなく、ただ静かに覚めた目でその光景を見つめる一匹の若い小鬼がいた。

別にあぶれて見張りを任されることもないのに、率先してお楽しみに混ざらないのは自制という言葉と無縁な小鬼にしては、かなり珍しい。

最初こそ怪訝な顔をされたものの、そこは欲望に素直なゴブリンのこと、獲物を前にぼさっとするただ愚鈍なやつだと馬鹿にされるも放置される程度で落ち着いた。

そんな同胞の揶揄も何のその、ぎゃあぎゃあごぶごぶ！と楽しげな連中から外れ、ただあまりものの肉片をかじりながら壁を背に座り込んでいる姿は惨めですらあった。

犯されている女と目があった。彼はそっと目をそらす。
現在進行形で地獄を味わっている彼女が気づいたのかは定かではないが、その瞳に映る感情は憐れみであった。

（やべーぞレ○プだ！・・・・いやいやそんなこと言ってる場合じゃないけどさ）

――転生者。それが変わり者の小鬼の正体であった。
産まれ落ちた瞬間に冒険者の洗礼（チュートリアル）のための矮小で姑息な雑魚という役割を担わされる筈だった駒に、何故か前世の記憶というオプションが付与されたために誕生した特異個体（ユニークモンスター）である。
前世に関しては特筆すべき事はない。病気だか事故だかで死因ははっきりとはしないし、ついでに名前も思い出せない。
ただ普通に生きて普通に過ごしていた日本人という事は覚えていて、そしてこの新たな小鬼生活を受け入れられないだけの無駄な倫理観だけがある。
そこは最初はもう流れに任せてヒャッハー！な展開も良いかと思ったが、実行する勇気のなかった小市民、そして女の子が不幸すぎる展開はちょっと趣味ではない、などと心中言い訳を述べ、しかし実際には助けようとはしない。
自分以外のゴブリンに情なんて高等なものが備わっていないことは直ぐに解った。

群れているのはそうすることで略奪がうまくいくからで、精々が弾除け程度の考えしかない。そして、そんな連中から折角の玩具を取り上げるなんてことしたら、仲間意識の欠片もない仲間たちに殺されるのがオチなのがわかりきっているからだ。
（こいつら笑いながら仲間もぶっ殺すからなぁ…。俺が食ってるこの肉だって、人のなのか仲間のなのか分かったもんじゃない）
それでも、喰わなきゃ死ぬしそれは嫌だ。

「ＧＯＲＢ！ＧＯＲＢＢ!!」
自分達がひとしきり楽しんだ後、この群れを率いる呪文使いの元に斥候が慌ててやって来た。どうやら拐ってきた娘を助けに冒険者がやってきたらしい。
そう冒険者！頭の痛くなる話だが、そんなＲＰＧでしかお目にかかったことのない職業がこの世界では一般的に存在するらしい。
徒党を組んで巣穴に我が物顔でやって来ては、自分達を襲ってくる連中だ！と大人たちは憤っていたが、どう考えても自業自得だしやっぱコイツらやべー奴らじゃんと絶句したのは記憶に新しい。
（おいおい勘弁してくれよ…戦うのとかやなんだけど）
そう思ったのは彼だけではないらしく、その知らせを聞き他の面々も機嫌を悪くす

る。

それも一党に女がいることを知らされるまでで、件の彼以外の小鬼が直ぐに下卑た顔を浮かべた。

もっとお楽しみにありつける！戦う前から自分が殺されるかもとは考えもしないその愚直な素直さが、一周回って羨ましくもあった。

略奪に染まれないし馴染めない。某世紀末のモヒカン以下の感性の小鬼としていきる上で、こんなに不便で不条理な事はない。

自分も純粋に愉しみを見いだせれば良かったのに。そうすればこんな最低な気持ちで死地に赴く必要なんて無かったんだ。

そんな弱音（じゃねん）が心に浮かぶ。

糸の切れた人形のように動かない娘に、いつのまにか白濁液に濡れた剥き出しの肌に集中していた己の視線を慌ててそらす。

（まだ、俺はまだ人間だ大丈夫。俺は悪くないし、しょうがないことだ。うん）

そんな自己肯定もままならぬ内に、呪術師が彼を含めた小鬼たちに命令を出した。

即ち、男は殺し女を生かして捕まえろ。という作戦というのもおこがましいものであるが、逆らうわけにはいかない。

彼は意気揚々と迎撃に向かう小鬼たちに足取り重くついていった。

幸いにも相手は初心者だったらしく、他の小鬼よりは頭のいい首領によって仕掛けられた罠に上手く嵌まったようだ。

数は三人。戦士職の男が二人に・・・多分魔術師の女が一人。

その足元には先走った連中が死体となって転がっていた。恐怖で体が震える。それに気がついた隣の奴が馬鹿にしてきたが無視した。

背後から襲撃され、慌てふためく姿に能天気な連中は嗤っているが、そこは同感。どうやらまだまだ俺は生き残れるらしい。

とは言っても油断して殺されるのも嫌だし、最前線でもなく、かといってサボっていると難癖をつけられないような絶妙な位置で棍棒を握って待機する。

暗闇で残虐な小鬼に囲まれ、哀れなほど顔を青くした女魔術師が呪文らしきものを唱える前に、弓矢を扱える奴が打ち込んだ。

呪文が厄介なのは底意地の悪い首領を見本に全員が知っているし、まぁ運が悪かったのだろう。

肩に突き刺さった矢の痛みで中断した隙に背後の連中が飛びかかり、地面に引き倒す。慌てて片割れが助けようとするが後頭部に手痛い一撃を受けて終わった。

敵に後ろを見せるのはいくら新入りでも軽率だなと淡白な感想が沸いてきた。

人が目の前で殺されそうなのに、俺もやっぱり小鬼なんだな。そんな自虐もセットで。

それがいけなかった。

仲間が倒れ、パニックに陥った戦士が、喚きながら剣を振り回す。そしてーー転んだ。

手から離れた刃は慣性に従うままに放物線を描き、此方に飛んできた。

当然、小鬼たちはそれを避ける。戦いに慣れていなかった彼以外は。

「ＧＯＲＢ、ＧＯ!?（えっちょ待っ）」

そんなのあり!?そう思い浮かべる間もなく、彼に刃が直撃する。

「ＧＯＲＢ！ＧＯＢＯ！」

脆弱な小鬼の体に致命的な傷をうけ、倒れる彼に向けられるのは、やれ愚鈍だ何だのという味方からの中傷であった。

余りにも呆気ない最後に浮かぶのは怒りと恐怖は勿論、少しの懺悔があった。

何の非もない女の子を見捨てて生きようとした罰なのかもしれないな、でも死ぬのは嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ!!俺は何も悪くないのに！

暗くなる視界、流れる血と恨み言は誰にも届くことはなかった。

こうして一匹の小鬼が死んだ。

闇一色の光景は突如、肌色と血の赤に変わった。
体が動かない。俺は死んだのでは・・・まさか今までのが夢だったんじゃ！
「「「ＧＯＲ!!ＧＯＢＯ!!」　」」」
その希望が続いたのは、げたげたと嗤う憎たらしい小鬼たちの姿を視野に収めるまでだった。
「あっ、嫌ァァァァッ!!!あ、アタシ、へへ、あひゃ、はへへへは、うひゃははは!!」
自らを見下ろす醜悪な面々と、そして股ぐらに自分を挟みながら発狂する女の絶望と嫌悪に染まった視線が全てを理解させた。
ああ、またなのか、また小鬼（ゴブリン）なのか！俺は本当の意味で小鬼転生者（ゴブリンリンターネイション）だったのか、と。
産まれたての小鬼の意味のない絶叫が洞窟にこだました。

小鬼は辛いよ

小鬼という種族は総じて傲慢である。

己以外の全てが劣っており、利用されるのが当然と心底考え、そしてその括りには同胞すらも入っている。

その上異常なほど嫉妬深く、愉しくないこと以外には等しく怠惰だ。まさに救いようのない種族。同じ混沌の祈らぬ者（ノンプレイヤー）たちからも見下されるのも仕方のないことだ。

ただし、単に愚かそのものという訳ではない。

そこそこなれたゴブリンの渡りならば、それこそ呪文を使えるほど頭のいい呪術師などは罠を仕掛ける程度の工夫はするし、当然身をもって知った経験からそれなりの学習もする。

例えば冒険者が灯りをもって移動する、というのも、これまで数えきれないほど討伐され、しかし生き延びた渡りが他の巣に伝える事で定着した常識だ。

つまり、どんな馬鹿でもやってやれないことはない。そういう事だろう。

地元民はおろか、冒険者もそう易々と近寄らない森の奥で、一匹のゴブリンが鍛練に精を出していた。

鍛練、といっても錆びた長剣をひたすら素振りするだけのおぼつかないものだったが、略奪を除けば基本的に怠惰なゴブリンが、汗をかきながらもそうするのは異様ですらある。

それでも体力の限界が来たのか、やがて長剣を放り投げると大の字に延びた。

「ＧＯＢ、ＧＯＢ、ＧＯＢＢＯ!!（はぁ、はぁ、やっぱこういうの自己流じゃ駄目だよなぁ）」

そう愚痴を紡ぐ小鬼転生者は、しかし態々ゴブリンなんぞに剣術を指南してくれる者がいるわけないから仕方ない、と呻いていた。

その体は通常のゴブリンよりも大柄な体躯の田舎者（ホブ）に成長していた。

無論、ここまで来るのにもかなりの経験が必要となった。

大人たちに鳴き声が煩すぎると産まれた直後に殺され、また小鬼に産まれては同様に発狂して死んだ。というか殺された。

というようなことを数度繰り返し、産まれる回数が二桁を超えるとなると、さすがにどんな馬鹿でもわかってくるものがある。

まず第一に、自分は死んでも記憶を引き継いで再び転生するらしい。それも小鬼限定でという嬉しくないオプションつきで。

どんなハードモードだよと見たこともない神に絶望したのは良い思い出だ。

それからは出来る限り生き延びるため、どうすれば長生きできるのかを模索した。
幸いにも時間も残機も有り余っていたので、それなりの試行錯誤はできた。
愚者は経験で学ぶというが、小鬼人生そのものをかけて学べたことは三つ。
危なくなったらとっとと逃げる。
大人の機嫌は損ねない。
利用できそうなのは良く見て覚える。
基本的にこのルールを厳守すれば、まぁ生き残れないことはなかった。
それでも抜け目のない冒険者に殺されたり、餓えた野性動物に殺されたり、もしくはふとした拍子に他のゴブリンの機嫌を損ねて殺されるというのも珍しくはない。
何気に最初の転生が運が良かった方だと知ったのは、俺以外にも兄弟がいる巣に転生した時に知った。
ゴブリンの子供が最初に食べる肉というのは基本的に死んだ母親か孕み袋のもので、当然数も限られる。となると子供連中で奪い合いになるわけで、大人が育児なんてする訳もなく、あぶれた連中が殺し合いをおっ始めるのも珍しくない。
となると基本平和主義者の俺が炙れるのは当然な訳で、もう悲惨そのものである。
あまりにも死にやすすぎて頭のネジが弾け、ついでに快く発散できない性欲が爆発してやけくそで奇声をあげて男女混合の冒険者の一党に全裸で突っ込んだり、新鮮な牛肉

を食べたすぎて村に単身奇声をあげて全裸で突っ込んだり、そして当然のように殺されたりして。

一時期は小鬼転生者（ゴブリンリンターネイション）というよりは小鬼狂人（ゴブリンマッドメン）じゃないかという有り様にもなっていたが、結局破れかぶれになっても何も変わらないと気がついて持ち直した。

今回だって、奇跡的に善人（間抜けなお優しい奴）が見落としたからこそ渡りになれた珍しい展開だったりする。

ちなみにその冒険者は他のゴブリンに奇襲されてファンブっていた。南無。

今の巣穴が壊滅してからは単独で行動している。他に何人か生き残ったかもしれないが、こっちはそれどころじゃなかったため、知ったことじゃない。

小鬼の巣というものは基本的に何もない。略奪種族の性か、装備が充実しているということはどこかしらか奪ってきた物で、当然その巣穴は冒険者に目をつけられている。

つまり武器も食料もついでに女も居る！＝生き残りやすいとは限らないのだ。いずれにしろ冒険者が殺しに来るのが分かっているので安心して引きこもることもできない。

尤も、上手く引きこもっても無駄飯ぐらいとして追い出されるか、最悪殺される可能性もあるからまさに素敵な八方塞がりだ。

（異世界転生ってもっと夢のあるものだと思ってたんだけどなぁ。当たり前だが現実っ

て厳しい！）

最初は渡りの性質を理解したとき、転生前の知識を上手く活用できないか考えた。

上位種がいるなら兎も角、ただのゴブリンしかいない巣穴の警戒は雑で、戦術も奇襲か突撃しかない。

落とし穴や鳴子などを用意するだけでも大分変わるだろうし、よしんば日本の現代知識で異世界無双も可能なのではーー

ーーといった青い希望は即潰えた。

例えば幼稚園児が無職の大人相手に生活が安定するから働こう！なんて言ったら馬鹿正直に聞き入れるだろうか？

常識的な相手なら兎も角、短気な相手なら激怒するのがオチだ。

そして現代の無職よりも遥かに短気で傲慢で危険なゴブリン相手に、上位種どころか産まれたてのガキが意見したら・・・お察しである。

それを身をもって知った時、何にせよ小鬼の社会で幅を効かせるには実力が必要だと

いうことが痛いほど分かった。
混乱に乗じて巣穴に転がっていた名も知れない誰かの遺品をかき集め、逃げ出すことこそ出来たものの方針は定かではない。
小鬼の体は脆弱性に反して環境には強いらしく、ちょっとやそっとの不衛生では病気にならないし妙なものを食っても腹を下さない。
できるだけ楽に手にはいるもの、森の植物や動物の死肉などをあさって、とりあえずは生き延びることはできている。
どうにかしてまともな物を食べようとして、毒性の木の実やらの中毒で死んで産まれ直した経験がここで生きた。
取り返しのつかないミスをしても帳消しになる。これだけは転生体質の数少ない利点と言えるかもしれない。
しかし、いざ強くなる！と決心しても成果といえば体がでかくなったこと以外はない。
どうせ死ぬときは死ぬんだから！とその場で手にはいる食料は食えるだけ掻き込んだが、その意地汚さが光ったのかもしれない。
一人で思い付くような自己鍛練など想像よりも高が知れているし、とりあえずの素振りの練習も様になっておらず、前世で剣道か空手でも習っておけば良かったと後悔し

た。

どれだけ楽観視しても、己の実力は一般的なホブゴブリンより下だろう。

ならば最初の巣穴の首魁のように呪術師(シャーマン)になればとも思ったが、想像よりも上位種は希少らしく、中々遭遇したことがない。あの横暴な態度もそれなりの才能がある故のものだったのかもしれない。

必死に記憶を辿り、唱えていた呪文も真似て唱えてみたが、才能がないのかそれとも指南される必要があるのか発動できなかった。

ならば人間の魔術師が使う呪文を盗み聞きして覚えようにも、聞き取るまえに彼方か此方が殺されるかして上手くいかない。

火球(ファイアボール)や電撃(サンダーボール)で殺されるのはもうこりごりだ。

今更ながら、魔法なんてものがあるとはつくづくファンタジーＲＰＧの世界である。ならばせめて自分も魔法を使ってみたい。そして程々に無双してみたい。

この糞みたいな小鬼生活を生きなければならないんだ。それぐらいの夢を見たって良いじゃないか。

この転生が続くのであれば呪術師の巣穴に産まれることもあるだろうし、その時はどうにか呪文を教えてもらうにしても、今はどうにもできないことだ。

「ＧＯＢＧＯＢＧＯＢＧＯＢ!!!!（カァッー!.労働のあとの水はうめえぇーー!!）」

側に放り投げていた皮袋を手繰り寄せ、水をがぶ飲みする。
ああ甘味が欲しい。砂糖！チョコレート！そしてジュース！酒でもいい！炊きたてのご飯と作りたての味噌汁が飲みたい！
前者は兎も角、後半はこの中世っぽい世界ではまず手には入らなさそうなのが辛い。
他もゴブリンの自分が食するにはこの皮袋と錆剣のように奪い取るしかないだろうし、前途多難である。
森で手にはいるものも限界があるだろうし、どうにかして食料が手には要らないものだろうか。できれば人を傷つけずに。
そんなことをぼんやりと考えていると、ふと食い散らかした木の実の残骸に目が止まる。
（これ、植えたらそのまま生えてきたりしないかなぁ）
農作をする。もしかしたらこれ以上ない名案なのではないだろうか。人から奪うのが嫌なら、自分で作れば良いのではないか！
自分で考え、新しい何かを作り出すことは人間の特権。ゴブリンとはいえ元人間である自分ができない通りはない！
そもそもガーデニングの経験すらない素人が知らない植物を育てられるのかとか、素手は無理だし耕すのはどうするのだとか、そもそも植えて育つものなのかとか、そんな

現実的な問題からはしばし目をそらし、彼はその不確かな希望に胸を踊らせていた。

そうしないとやっていられなかった。

傍観という罪

結論からいうと農作は上手くいかなかった。
錆剣を使ってせっせと耕し、愛着の沸いてきたそれがポッキリ逝って絶望し、疲労困憊になりつつも畑らしきものは作った。
当たり前だが植物を植えても実がなるのに時間がかかるし、肥料こそ自分の糞尿を使って賄えたが、実際に収穫などの形になるにはそれこそ気長に待つしかない。
それを待っている間にも腹は減る。
ホブゴブリンになったことで食事の量が増えたことが餓えに拍車をかけた。
近隣の食べられるものは粗方漁りつくし、ならば肉を探そうにも、案外他のゴブリンや動物に漁られてそうそう見つかるものではない。
蓄えが少なく、節制のしすぎであまりにも腹が減って、餓死する前に転生（リセット）するのもありか、何て狂った考えが浮かんだが、今回は初の上位種ということもあり勿体無い。次になれる保証は無いのだ。
――用心棒になる。

そんな八方塞がりの小鬼転生者の脳裏に浮かんだのは、今まで敢えて考えないようにしていたその選択肢だった。
当たり前だがホブゴブリンは普通のゴブリンよりは断然に強い。
野良のゴブリンが渡りとして用心棒になるのは有力な生きる手段でもある。
なあに、危なくなったら他の連中に押し付けて逃げりゃ良いのさ。
とはなんとも小鬼らしい考えだったが、ここまで成長して死ぬなんて事は絶対避けたい。
脆弱な小鬼が生き延びるのは想像以上に難しいのだから。
「ＧＯＢＧＯＢ!!（ちわーすっ、俺渡りなんだけど用心棒になるぜ?･）」
「ＧＯＢ?!ＧＯＢＧＯＢ!!」
この辺りに少数の群れがいるのは探索時に見かけたことがあるから知っていた。
これまで関わるのが嫌で見かけるなり逃げていたが、数が少ないのであれば他に上位種がいない可能性もあり、好都合だ。
使える奴が増えれば奪うのも楽だし、自分の食い扶持も増えるだろう！と好意的に巣穴に連れていかれるまでは計算内。
「ＧＯＢ!!ＧＯＢＧＯＢ!!」
「･･･ＧＯＢ（マジかよ）」

予想外なのは、そこに女(孕み袋)が居たことだった。
冒険者かどうかは全裸なので判別がつかなが、想定よりも群れの数が少ないのは既に討伐され減られたからかもしれない。
幸先の良さに一転して最低な気分の上に、挨拶もそこそこに夢中に腰をふる同胞たちにうんざりする。
産まれは違っても結局ゴブリンの行動はどこも一緒らしい。
「あ”、う”っ”…」
鼓膜を打つ苦悶の声に、背筋が凍る。
前と違っているのは、やられてる最中も叫ぶほどの気力があの子に無いことか。
遊び半分でいたぶられたのか、身体中生傷だらけでそこそこ使いふるされているらしい。
みるとその目に生気はなく、食事もろくに食べさせていないのか、あばらも透けて、今すぐに何とかしないと命が危ないことは明らかだ。
貴重品を大切にするなんてゴブリンは考えない。犯している最中に死んだとしても自分が満足するまで使って、お前らが世話しないから死んだんだ!と周囲に当たり散らし、そして悪気もなく喰うだけだろう。
助けないと、死ぬ。また女の子が、運が良ければ幸せな未来もあった筈の、人間の子

供を両手で抱いたかもしれないのに、何も悪くないかもしれない子が。
「ＧＯＢ!!ＧＯＢ!!」
視線に気がついたのか、性を放出し終わったひとりが此方に駆け寄ってきた。
次に抱かないかと聞いてくるそのゴブリンは、多分、俺が女にありつけないから機嫌が悪くなったと思ったのだろう。
小鬼にしては特殊な心掛けだが、気をきかせたというより、苛立ちで暴れられでもしたら困るからしょうがないという苛立ち半分と、ここで強い奴に恩を売っておこうという打算半分といったところか。
その醜悪な顔には媚を売ってやってやるという感情が丸出しだった。
実に小鬼らしい打算的な思考だ。隠そうともしない姿勢にヘドが出る。
「ＧＯＢ!!?」
衝動的にそのにやけ面に手が出ていた。
めり込む拳に鼻が折れた感触が伝わる。悲鳴も何もかもがひたすらに気持ち悪い。
派手なふっ飛びかたをしたが死ぬほどではなかったらしく、
『俺が気を利かせてやったのに、なんだこの恩知らずは!』と喚きだすが、俺の表情を見て口ごもり、不満げに引き下がった。
今の俺なら冗談抜きで殺されるかもしれないと馬鹿でも悟ったのだろう。

そうだ。誰だって痛いのは嫌だ。死ぬのなんてもっと嫌だ。俺たち(ゴブリン)も、そして人間も。

何でそんな当たり前のことが、こいつらは分からないんだ。

「ＧＯＢ!!ＧＯＢ!!ＧＯＢ!!ＧＯＢ!!」

そんな騒ぎなんて知ったことじゃないのか、注目されたのは最初だけで、すぐに他のゴブリンは盛り続ける。

愛着なんて欠片もない、まさに使い捨ての性具のような扱いだ。

生きる価値のない屑とはコイツらのことを言うのだろう。

そして、もはや無力な子供じゃないホブゴブリンなら、後先考えずに暴れればまだこの全員から助けられるだろう。

腕力だって俺の方が強いのはさっきので分かった。

武器がなんだ。毒が塗られているだろうがゴブリンならすぐ死ぬ訳じゃない・・・かもしれない。

後は、やるのかやらないのか。

俺は、目を逸らした。
痛いのは嫌だ。嫌なんだ。またやり直す(産まれる)のは嫌なんだ。
血と汚物にまみれて、何も変わらない現実と向きあわされるのはもう嫌だ。

例え助けたとしても、それでどうなる？
人が小鬼にどんな感情を抱いているかなんて、転生(産まれて)から嫌というほど実感させられた。
切り殺された。燃やされた。貫かれた。ただ敵意や嫌悪の元にゴミのように殺されて、それでも殺される当人が小鬼(ゴブリン)だからそれも仕方がないと納得してしまうほどに！
俺がこの子を救っても、向けられるはそういう感情しかあり得ない。
英雄(ヒーロー)になれる所か、どこまでいっても俺はただの一匹のイカれた小鬼(ゴブリン)でしかない！
そう、イカれてるのだ。
普通ならこんなことは考えないし心も痛まない。加虐を愉しみ凌辱を求めない小鬼なんてどうかしてる。ゴブリンにとってそれこそが普通であり、この場においては俺が異常だ。
俺は悪くないんだ。望んでこうなった訳じゃないのに、どうしてこんな気持ちになならなきゃいけないんだ！

「ＧＯＢＧＯＢ!!（疲れたから俺は寝る！）」
吐き捨てるように叫ぶと洞窟の奥へと、見たくないものを見ないように走った。
背中に感じる連中の怪訝そうな視線を無視し、出来る限り音を聞かないように耳を塞ぎ、意識を閉じることで選択から逃げた。
翌朝、畑もどきの様子を見に行った後、巣穴に戻るとあの子は死んでいた。
かつて人間だったものが、尊厳も何もかも奪い尽くされ、最後にはその躯すらも解体されて貪り喰われる。
機嫌を取るためだろうか、比較的大きめの肉片を渡された。
心の何かが壊れた気がした。

それから数日がたった。
先日の一件から他のゴブリンは、彼に対して群れの長のような接し方をしていた。
実力を認められたというより、他にホブゴブリンより強いものがおらず、『急に暴れる危ない奴みたいだから、とりあえず機嫌を損ねないようにしておいてやろう』といった意図が見え透いた尊敬とは程遠いものだったが。
あれから他の小鬼に対して暴力を振るうことに戸惑いは無くなった。

どうあがいても馬が合わないとはっきり理解したし、ゴブリンは力を誇示していれば滑稽なほど下手に出てくる。

その心中にどんな罵倒が渦巻いているのかは別にして。

飯を食っては食っちゃ寝の姿勢に不満の声はない。

他のゴブリンも似たようなものだったし、冒険者も今のところ襲撃してくる様子もない。

ここ最近は自己嫌悪で寧ろ殺されたい気分だったが、つくづく現実は思うようにいかないようだ。

「ＧＯＢ!!ＧＯＢ!!」

そんな彼の心境などいざ知らず、用心棒を加えて気が大きくなったのか、今夜にでも補充をしようという話が持ち上がっていた。

どうやら少し遠くに村があるらしく、遠征して襲うつもりらしい。

玩具（孕み袋）が壊れて新しいのを補充したいし、食い物も残り少ない。

ついでに増えた仲間（ごくつぶし）が死ねば取り分が増えるし、危なくなったら自分だけ逃げりゃいいのさ。そんな邪悪で身勝手な思考で、不幸な犠牲者がでるのだろう。

この群れはこれまでと違って数が多い。

このあたりの食料が乏しいのははぐれの小鬼や小規模の群れが多かったからしく、

あぶれた連中が集合してあっという間に大所帯になった。
食い扶持のない奴等が統合されたため、上位種こそ俺以外は居ないものの、渡りも含めたその戦力は自衛手段の乏しい村にとって驚異となるほどに成長してしまっている。
まだ得てもいない戦利品や凌辱の想像に沸き立つ小鬼たちを、小鬼転生者は無感動に見つめていた。
もう止まれないし止められない。
上手くいくならそれでいい、殺されるなら死んでやる。
もうどうにでもなれ！

チュートリアルの終わり

「ゴブリンだ！ゴブリンの群れだーー!!」
やめろ。
「ＧＯＢＧＯＢ!!」
やめてくれ。
「痛い痛い！ヤダヤダやめてえぇぇーーっ!!」
煩い。
「くるな！嫌だ死にたくなっ」
聞きたくない。
「くそっ、何だこの数はーーぐはっ!!」
やめろ。俺にそんなもの向けるな。

地獄のような光景だった。
愛する家族、隣人、伴侶のそのどれかを喪い、恐怖する只人達の悲鳴と、それを愉し

む薄汚い欲望を多段に含んだ小鬼の笑い声が渦巻き、平和だった村は一瞬にして崩壊する。

無警戒な夜間の警備は草むらから奇襲され殺された。寝静まった者は抵抗する間もなく始末され、悲鳴で起きた者も闇に乗じて餌食にされる。

女なら・・・語るまでもない。

闇に潜み襲撃してきたゴブリンを前に、自衛手段を持たない彼らはただ蹂躙される。

夜(ひる)はゴブリンの時間だ。

選択から逃げ続けた彼は、ただ流されるままに狂乱に飲まれていた。

右をみても左をみても見たくないものばかり。夜目のきくゴブリンには余すところなく悲劇の全てが見えてしまう。

どうしてこうなった?

そう意味のない問いを繰り返し、ふらふらと人の村を闊歩する。

その様は幽鬼のように生気がなく、蹂躙される村人からは恐怖の眼が向けられる。それが堪らなく苦しい。頭の奥が鈍く痛む。

ゴブリンとなって初めて生きたまま人間の村に入ったが、それがこんな状況になるとは考えたくなかった。

宴に夢中な仲間も、襲われる人間にも誰にも相手にされていない。

そんな俺がなぜこの場にいるのだろうか、ふとそんな考えが浮かんできた。
そうだ。俺はゴブリンだからだ。何も変なことはない。
奪って犯して壊す。当然の事だ。何だ、何も難しいことではない！
ふと鼻腔をくすぐる甘い香りに気がついた。女だ！女がいる！それも複数！
疲れきった人間の心には浮上する小鬼のそれに抗う気力はもはや無い。
彼は沸き上がってくる本能に身の任せるままに彼は民家に突撃した。
匂いの元はどうやら家に立てこもっているらしく、仲間たちが怒声を上げて扉を破ろうと四苦八苦していた。
なるほど、貧弱な小鬼じゃその程度だろう。でも俺は違う。俺はコイツらより強い田舎者だ。
「ＧＯＢＧＯＢ!!（邪魔だどけ！）」
愚鈍な連中を強引に押し退けると、転生者は力任せに木製のドアを蹴破る。
ほうら、簡単だ。やっぱり俺はコイツらより優れてるんだ。
そんな優越感と高ぶる情欲にぎらつく目が捉えたのは、姉妹だろうか、三人の少女だった。
どの娘も器量がいいし、まだ手をつけられてない獲物だ。
もはや小鬼そのものと堕ちた彼は、あれほど嫌悪していた行為を率先して行おうとし

た。

「ここは私が何とかするから、二人は早く逃げるのよ！」

その光景を見るまでは。

金髪長髪（ロング）の若い女が、鍬を片手に立ちふさがった。

怖いのだろう、自分よりも巨大な怪物を前にして、震えながらも必死で自分より弱いものを守るその姿は、ゴブリンには決して存在しない感情で、そして彼はそれをとても尊いものに感じた。

呑まれかけた彼の脳裏に理性が戻る。

（・・・えっ、おれ、何をしてーー）

呆然自失とはこの事か。

我に帰った彼は先程までの自分自身がとてつもなく恐ろしくなった。

しかし、立ち尽くす間も時は止まってくれない。

自分のおかげ（せい）で楽々と入り込めた小鬼たちは、上質な獲物たちを見て上機嫌だ。棒切れを握りしめて此方を睨み付ける女の隠しきれない恐怖を目敏く嘲笑っている。

それでも大切な者のためか、気丈にも此方を睨み抵抗する長女だったが、別のゴブリンに引き倒された。

「お姉ちゃん!!」
妹たちの悲鳴など無視し、笑うゴブリンたちに力任せにひんむかれる長女は、それでも二人に必死に話しかける。
「私はいいから・・・早く逃げて・・・ッ!」

胸の底から凄まじい激情が溢れてきた。
怒りもそうだが、美しいものに泥を塗るような連中(ゴブリン)に、そして自分がその一因になった事への恥を含めていた。
自分を取り巻く全てが不愉快で不条理で不本意そのものだ。
なぜ、俺がこんなに苦しんでいるのにこの屑どもは楽しんでいる?
なぜ、この娘の献身に感じ入らないんだ!
奴等の欲望のままに突き動く姿勢は、己の感じている葛藤や苦悩とは程遠い。
身を任せれば、確かに楽だった。
しかし俺はそうできない。してはいけない。
魂に根付いた人間性(キャラクター)が、小鬼の全てを拒絶するから。
なるほど、確かに衝動のままに解き放てばさぞ愉しいのだろう。
えもしれぬ快感なのだろう。

もし俺がそれに堕ちたら、それこそ俺という個人は転生を経ても完全に死ぬ。
ただの凡庸な小鬼一匹として埋もれるだけだ。
ーーそれは、絶対に嫌だ。もしかしたら、死ぬことよりも。
そうだ、思ったじゃないか。”死んでやる”って。
生きようが死のうが俺には必ず次がある。失敗なんてあり得ないなら、今したいことをすればいい。

床にある鍬を持ち上げ、いざ女を貫かんとしていた屑の無防備な頭に突き立てる。
熟れた果実のように容易く炸裂した頭部の感触は何と心地よいことか！
人らしからぬ暗い情欲に酔いしれると、先走った奴が殺されて、それでも連中は愉快そうに嗤っていた。
『馬鹿め、俺よりも先に味見しようとするからだ。いい気味だな』なんてとことん自分中心の嗜好で。
それも自分たちの番が回ってくるまでだ。
転生者が先にやるつもりだとでも思っていたのか、まだ長女を無防備に床に押さえ込んでいた奴等を同じように始末する。
フルスイングの要領で振り抜かれた鍬が深く体にめり込み、血飛沫をあげる。

「ＧＯＢ!!?ＧＯＢ!!!」
「ＧＯＢＧＯＢ!!!」
「ＧＯＢＧＯＢ!!?」

いきなりの凶行にわめきたてるが、その声に殺された仲間への追悼の意はない。ただ困惑とお楽しみを邪魔された怒りだけだ。

自分と違って実にゴブリンらしいその姿勢に、嫉妬と怒りが更に上昇する。

（こいつらは、美しくない）

側の奴の首を力任せに引っこ抜いた。

（こいつらは、悪い奴等だ）

間合いに入ってきた奴は踏み潰した。

（悪役なら、殺しても構わない）

短剣で飛びかかってきた奴を逆に捕まえて、盾にしてやった。

小鬼転生者は衝動のままに殺し続ける。ある意味最も小鬼らしい感情のままに、己のそうしたいという考えに任せる。

全身に力がみなぎる。ああ、したいことをするというのは何とも素晴らしい。

殺戮に興じていると、まぬけ面を晒す仲間たちも、眼前の暴力に恐怖する娘たちも全てがどうでもよくなる。

（そもそも俺は考えすぎだったんだ。人生は楽しまなきゃ）

後先なんて知ったことじゃない。

そうして屋内の仲間を殺し尽くすと、呆然とする姉妹たちへと目を向ける。

『ごめんな、怖かっただろ？』

小鬼語ではなく、久しく喋っていなかった日本語で語りかける。

鳴き声とも違う、明らかに秩序だった異国の言葉を小鬼が話す。

その異常性はゴブリンが突如仲間割れを始めたことよりも更に彼女たちを混乱させたようだ。

「来ないでッ！」

眼前の殺戮者から、長女が産まれたままの姿で身を盾にして妹たちを庇う。

己が歩み寄ると彼女たちは怯えきった様子で此方を睨んでくる。

その視線には恐怖しかない。胸に渦巻く感情に比例して冷静な頭は、それも当然だと納得していた。

薄汚い小鬼で、しかもその返り血にまみれた自分はさぞおぞましいのだろう。

目に毒だな。そんな淡白な感想から、側に落ちていた布を拾い上げて彼女たちに放り投げる。血にまみれてはいるが、裸体を晒すよりはましな筈だ。

意図が読めず、目に見えて混乱する彼女たちに構うことなく、転生者はふと下を指差

した。床下になら隠れられるだけの隙間があるかもしれない。

『隠れていろ。そして、生きてくれ』

俺と違って、君たちには今しかないのだから。

宴に夢中といっても、流石に同胞の断末魔ばかりが聞こえてくれば馬鹿でも気にもなるのだろう。

何事かと騒ぎ立てる屑ども（なかま）たちの声を聞き届け、その場を立ち去る。

少なくとも今この場において、彼がしたいことははっきりしていた。

『小鬼（ゴブリン）は、皆殺しだ』

『はぁ、はぁ、ははは、痛ッたいなぁもう！』

かつて村だった場所に、もはや息のある者はいない。ゴブリンも人間も、殆どが死に絶え躯を晒している。

村を襲撃した面々の殆どをがむしゃらに殺し尽くした彼は、当然のように瀕死だった。

死を厭わない死兵のごとき戦いを経て、まさにその命は風前の灯に近い。

とっくの昔に折れた鍬を杖として辛うじて直立を保っているが、その身体中には無数の刀傷や矢が刺さっていた。しかしその痛みが不思議と心地よい。

彼の心は小鬼に転生して初めて清々しい気持ちで満ちていた。

助けられなかった命には申し訳ないが、それでも何人かは生き延びた・・・筈だ。多分。

間に合わなかった人には申し訳ないが、俺の命で勘弁してくれ。あ、生き返るから釣り合わないか。

今際の際にそんな間抜けな事を考えられるのも、転生様々である。

自分の意思で行動する。口にするのは簡単で、しかし実は何とも難しいものだが、その選択に満足できるとは自分はさも幸運ではないだろうか。

流れ出る血には構わない。止血なんて諦めている。

物凄く眠いし、毒が回ったのか目も霞んできた。

（俺は、人間だ。ゴブリンなんかになってやるもんか。ざまあみやがれ）

彼は打ち勝ったのだ。魅力的な本能に、小鬼としての性に。

誰に対してのものなのかも分からない、漠然とした勝利感に酔いしれるままに彼は逝った。

「・・・何だこの状況は？」

その魂が離れる刹那、死に絶えたゴブリンの群れに困惑するとある老圃人（レーア）の呟きに彼が気づくことは無かった。

ＩＦ．ゴブリンミリオンガール

四方世界の一角では、平穏な日常の傍らで当たり前のように惨事（イベント）が起こっている。

その中でも最もありふれて凡庸なのが小鬼（ゴブリン）の襲撃（レイズ）であり、街道と辺境を繋ぐ人気の疎らなその道で事は起こっていた。

駆け出しの女宝石商人にとって、その商談は一世一代の大仕事だった。

庶民にも手の届く装身具（アクセサリー）や貴金属（ジュエリー）の販売と流通を家業とする実家に産まれ、親の家業を継み、長年下積みをしてそこそこ控え目に日々を生きていた彼女に訪れた新しい取引先と新店舗開業の打診はまさに好機だった。

取引先が見本の運搬に向かない、やや遠い辺境だったことが唯一の欠点だったが、家業で名を残したいと野心に燃えていた彼女は二つ返事で了承した。

勿論、安価に設定しているといっても宝石類や元手の材料は相応のものを使っている。

もしもの場合に備え、それなりの金貨を積んで有力な冒険者を雇い、不安要素は出来る限り排除した筈だった。

何も心配はない、最初はそう思っていた。

まさか只人の領域に近い場所で、しかも真っ昼間に小鬼（ゴブリン）に囲まれるというのはどんな不運（ファンブル）なのだというのか。

「はぁ、はぁ、何だよコイツら！全然怯まねぇぞッ!!」

飛びかかる小鬼を切り殺した男剣士が吐き捨てるように叫ぶ。

護衛を請け負ったのは中堅と呼ばれる紅玉の一党だった。無論、ゴブリンの相手をすることはこれが初めてではない。駆け出しの頃に受けた手痛い洗礼により小鬼の驚異も手口もある程度は知っていた。

しかし、この群れは何かがおかしい。冒険者としての感が強く警報をならしている。

「ＧＯＢＧＯＢ!!」

「ＧＯＢＧＯＢ」

「ＧＯＲＢＢ!!」

ゴブリン達は仲間が殺されようと一切気にせず、鬼気迫る様子で次から次に襲いかかってくる。

その人ならざる黄色い眼光にはある種の使命感すら感じられた。

「援護します！時間を稼いでください！」

一党の頭目（リーダー）である彼を援護しようと、背後では前衛の魔術師が呪文を唱え始めていた。

「ＧＯＲＢＢ!!」
しかし、先に敵前から到来した雷矢（サンダーアロー）により先手をとられ、その口が呪文を語ることはなかった。
己の手柄を誇示するかのように、独特な衣装（ローブ）を纏ったゴブリンが部隊の後方に陣取っていた。
「馬鹿な、呪術師（シャーマン）だと!?」
通常、群れの長になる事の多い呪術師が自ら略奪に赴く事態は相当に珍しい。相応の獲物とお楽しみが期待できる村を襲うのなら兎も角、馬車の襲撃となると稀だろう。
しかも、奴等は夜行性だ。まだ日は高い。なぜ昼に人の領域に現れた!?
さらに信じがたいことに、杖をもった個体はその場に複数存在していた。
「畜生、おい大丈夫かっ」
多勢に無勢な状況で、しかし情に厚い男戦士が背後から漂う肉の焦げた匂いと断末魔に一瞬だけ硬直した。男剣士が怒声を上げて引き留めるが、その隙を見逃すゴブリンではない。
別のシャーマンが唱え終えた呪文を馬車一体に向けて解き放った。
薄い霧状に広がった魔法は、不運な只人たちに強制的な眠気をもたらす。
「眠雲（スリープ）・・・糞っ・・・・」

シャーマンが使う呪文は雷矢（サンダーボルト）だけではない。稀にだが複数の術を行使したり、或いは珍しい呪文を習得している個体も居ないことはない。

倒れる男剣士が最後に見た光景は、此方を愉快そうに見下ろす小鬼たちの姿だった。

冒険者（じゃまもの）に勝利したゴブリンたちは、我先にと馬車に群がり戦利品を漁り出す。

「ひっ、ひぃっ!?」

やがて馬車から引きずり下ろされたのは、唯一泥酔から逃れた女宝石商だった。

この場において彼女のみ、肌身離さず身に付けていた家宝の魔法避け（マジックアイテム）の指輪により唯一意識を保っていた。

しかし護衛も死に絶えた中では、女一人ではあまりに無力だった。

自分は殺されるのか。いや、ゴブリンが捕虜にした女性に何をするのかは分かりきっている。都から遠い街に住む彼女には不運にもそれを理解していた。

「……？」

しかし、待てども事は起こらない。逃避のために閉じていた眼を恐る恐る開くと、ゴブリンたちは彼女を見張りつつも荷漁りに集中しているようだった。

見れば呪文使いですら、普通のゴブリンに混ざって作業を手伝っている。勤勉という言葉とは最も無縁な存在である小鬼がだ。

ゴブリンは我慢を知らない。目の前にいたぶれる女や堪能できる備蓄があれば、上位

種族に従っている群れでもないかぎり後先考えずに貪り尽くす。

だと言うのに、その小鬼たちは襲撃した商隊の唯一の女には目もくれず、凡そ必要のないであろう趣向品を片っ端からかき集めていた。それも食料は兎に角、金貨や指輪、アクセサリーなどの光り物を集中して探しているようだ。

まさか小鬼に装飾品を身に付けるような美的感覚もあるまいに、食べられもしない代物をせっせと集める様は奇特である。

辺境の小鬼殺しならば違和感を覚えただろうが、冒険者ではない彼女には分からない。ただ、理由こそ知らぬが自分が二の次にされている事だけは理解できた。

「ＧＯＲＢＢ!!ＧＯＢＧＯＢ!!」

その隙に逃げ出そうにも、小鬼が監視するなか動くわけにもいかず、困惑するままに女商人はその光景を見守るしかない。

目の前で商売道具が漁られる姿を見続けることは根っからの商売人である彼女には苦痛であったが、それこそ死ねば無価値。

生きていてこそ次があるのだから、じっと耐えて逃げ道を探す。しかし、そんな上手い手が容易く見つかる訳がなく、ゴブリンの収穫の方が終わってしまった。

持参した粗方袋に粗方の戦利品を集め終わり、手の空いたゴブリンたちの数多の眼が彼女に集中する。

「ひっ!?‥‥いや、来ないで!!」

凄まじい嫌悪と恐怖から体の震えが止まらない。誰か、助けて!そんな思いに答えてくれるほどこの世界は優しくないし、もしそうならこんなことにはなっていない。

救いの手が差し伸べられることはなく、ついでにゴブリンの手も延びなかった。

「‥‥ＧＯＢ」

「ＧＯＢＧＯＢ?」

「ＧＯＲＢＧＯＢＯ!」

耳障りな鳴き声で相談し会うゴブリンたち。奇妙なことに、彼らの間には若干の諦めと残念そうな感情が漂っていた。

例えるなら、提示された代物に満足しなかった顧客のそれだ。この場合の代物は女宝石商であり、彼女は何故か気に入られなかったらしい。

ふと一匹の小鬼が彼女の指輪に目敏く気づき、それが珍しいマジックアイテムだと看破したリーダー格の呪文使いが手を伸ばす。ふいに触れられた彼女は堪らず悲鳴をあげる。

「や、止めて!　返しぎゃ!?」

ゴブリンは抵抗する彼女を煩わしそうに殴り飛ばし、嗚咽する姿を嘲笑う。強奪した指輪を弄くり回した呪文使いが、ふと号令をあげた。只人には煩わしい金切り声にしか聞こえないそれは、撤退を意味していた。

信じがたいことに、彼らはそのまま立ち去っていった。

ぞろぞろと引き上げる小鬼たちを呆気にとられた顔で見送る女宝石商は、暫し時が経ってから呆然と呟いた。

「た・・・助かった？」

そんな彼女に一切の興味を向けず、興奮したゴブリンたちは和気藹々としていた。背負った荷物も重いだろうに、仲良し小鬼（フレンドリー）とは珍しい。

ぎゃあぎゃあごぶごぶ！と愉快げに行進し、眠気も何のその、死んだ仲間（まぬけ）も気にせずに彼らは巣（我が家）に帰還する。

彼らの言葉を要約するとこうだ。

ああ、やっと献上品（プレゼント）を手にいれた！あの方（・・・）もきっとお喜びになるぞ！

人は殺すなとは言われたがしょうがない！きっと褒美もあり得るぞ！
ゴブリンたちは凡そ小鬼らしくない結束で結ばれていた。

只人の領域から外れた森の奥の更に深遠。木々の生い茂るなかにひとつの洞窟がある。自然の奇跡で構築された広大な空間には、夥しい数のゴブリンたちがたむろしていた。
ただの小鬼は数えきれず、中には田舎小鬼（ホブ）や呪文使い（シャーマン）、英雄（チャンピオン）すらも居る。
その全てが息を潜めてじっと待機していた。まるで、親の期待に輝かせる子供のような無垢な有り様で。
遠征から帰還した面々を迎え、彼らは自らの象徴を待ちわびる。
やがて、鍾乳洞の奥から異質な人影が姿を表した。
すらりとした体型に、女性らしい強調された体の凹凸。しかし贅肉の類はなく、引き締まったスタイルのゴブリンだった。
そう、ゴブリン。
緑の肌や尖った耳を除けば只人やあるいは森人の女性にしか見えないその個体は、世

にも珍しい雌の小鬼だった。
強奪されたであろう只人の婦人服（ドレス）を身に纏い、献上されたばかりの宝石（ジュエリー）や装飾品（アクセサリー）で着飾った姿はある種のカリスマと淫靡さを両立させていた。
彼女は魅いるゴブリンたちを高台から見渡すと、ふと柔らかそうな唇が言葉を紡ぐ。

『ＧＯＢＲ』

小鬼らしくない、女性的で透き通るような声で語られた収穫の労いと感謝を告げる小鬼語に、全てのゴブリンが忽ち骨抜きにされ、惚けた顔で感動していた。
そこに小鬼らしい性欲はなく、信仰に近い熱烈な愛情と熱気のみがあった。
『ああ、何と美しい女性（メス）だ。こんなに美しいものが存在していいのか。この御方と比べたら他など肉にしか見えないじゃないか』
そんな心の声が聴こえてくるようだった。略奪組が女宝石商に手を出さなかったのは、この小鬼の存在で彼らの心が塗り潰されていたからだ。
そんな小鬼信者（ファンタスム）を従える小鬼の雌、あえて名付けるのなら――

ーー小鬼姫（ゴブリンアイドル）

（‥‥いやいやどうしてこうなった）

どいつもこいつも気色悪い顔で惚けるゴブリンに囲まれた状況に、微笑みの下で必死に内心の緊張と恐怖を押し隠し、平静を装う彼女は小鬼転生者であった。

小鬼に転生し続けること早三桁を越え、今回は何の不具合（バグ）か雌ゴブリンなんて超希少な変種に転生していた。

今更ながら異世界転生とかそもそもあり得ない。そして自分がゴブリンとかもっとあり得ない！

そして何で俺が雌なんだよお前ら雄しか居ないんじゃないのかよ、何て久方ぶりの大混乱に陥るも、産まれたばかりで何故か周囲の親や兄弟に女神のごとく崇められ、やれ珍しい（レアだ）し成長してみようと培った転生知識を駆使して生き延びてみたらあらびっくり、あっという間に大ゴブサーの姫になってしまった。

黙っていても食料や寝床を献上され、寒さに震えることも無理して狩りをする必要もない、今までの人生（ゴブリンライフ）と比べ物にならないほどの難易度（イージーモード）だったが、内心平穏とは程遠い。

種族単位の強姦魔の群れにひとりだけ女性が居るなんて、植えた狼の群れに羊を放り込むような状況と何も変わらない。

幸いにも連中は互いに牽制しあっているのか直接的に手を出されたことはなく、まだ清い身ではあるが、それがずっと続くなんて保証はないのだ。

頼んでもいないのに装飾品（プレゼント）を押し付けられ、しかし拒否しようものなら何をされるのか分かったもんじゃない。

あまり人を殺さないように言い含めてはいるが、聞いているのかいないのか・・・。

どう考えても高価な代物を強奪したら冒険者に目をつけられる事になるし、前例のないこの状況はどうすればいいのか皆目分からない。

「ＧＯＲＢ!!ＧＯＢＯ!!」

褒美をねだってきた呪文使い（シャーマン）を適当に撫でてやったら、そいつへの嫉妬（ヘイト）と殺意の視線が物凄かった。

後で袋叩きにされるだろうに、考えなしなのは変わらないらしい。

（マジでどうしてこうなった・・・へるぷ、みー）

答えるものなど居はしないが、そう呟かずには居られなかった。

異常（ぜんりょう）なゴブリン

小鬼の宿命をはねのけた元人間が村を助け、大勝利（ハッピーエンド）!!

そういかないのが現実の非情さだ。そもそも助けるに達してねーよ、行動も遅かったし。そんな愚痴が溢れるのも何時もの事。あの夜に盛大に立ち往生して逝った後にも忌々しい転生は続き、早五年ほどの歳月が過ぎていた。

どうもゴブリンの討伐は新人冒険者の洗礼（チュートリアル）のような扱いらしい。彼は繰り返して転生する中でそんな感想を抱いた。

遭遇する冒険者のどいつもこいつも、素人目ですら手練（ベテラン）れには見えない連中ばかり。酷いものだと奇襲は勿論、負傷した際の装備や対応も考えていないのか終止後手という場合も珍しくなかったからだ。その場合でもよほど迂闊でもないかぎり殺されてしまう小鬼の脆弱性に笑えばいいのかも分からない。

そんな素人に毛が生えたような新入りでも、初回で討伐できるのが約七割ほど。

つまり１００匹の小鬼が産（リスポーン）まれたとして、渡りに成れずに死亡するのがその内の七割。生き残った三割がホブやシャーマンになるということになる。

現在はそれに概ねそった形で転生を繰り返していた。

さてそんな小鬼生活を積み重ねていくと、段々と自分が変容していくような感覚に陥ることもある。

混沌の性か、小鬼の持つ暴力的な衝動を最終的に受け入れることにした。

勿論、どれだけ小鬼に産まれ落ちようが自分が人間であるという気持ち（スタンス）は変わることはなし変えるつもりはない。

人に暴力を振るうことは殺る気マンマンの冒険者なら兎も角、一般人を手にかけるのは単純に嫌だ。なのでその矛先は概ね同族に向ける形になった。

他者の苦しみを素直に愉悦とする術を得た。小難しい言い方をしたが、要は嫌がらせが大好きになっただけだ。

仲間の死すら嘲笑し、同族に共感を持たないゴブリンでも、まさか命を賭けてまで自分達を陥れる同胞が居るなんて思い付かないのか、捻り出した嫌がらせの数々はどれも面白いくらいに引っ掛かった。

例えば「これ旨くて美味しいゾ！」と食べられるし味も悪くないが毒性の強い植物や茸をしれっと食べさせて弱らせたり、あるいはそれを煎じた毒薬を群れの備蓄に混ぜて皆殺しにしたり、シンプルに溜め込んだ略奪品を全部燃やしたり。捕らわれたばかりでまだ元気のある冒険者の女性たちに武器と装備を渡して暴れさせたり、昼（よる）に見張りに名乗り出て、全員が眠った時に火をつけて炙り殺したり。

一番傑作だったのはシャーマンの支配する巣で配下の連中を扇動した時だ。基本的に偉そうな首領に不満を抱く事は知っていたので、精々仲違いする程度かと思ったら、少し煽ってやるだけであっという間に殺しあい(バトルロワイアル)が始まった。

用心棒のホブが率いる俺こそ長だ！派と残存の呪文使い派、そして少数の漁夫の利を狙った俺様こそ新しい首領になる！派が３つどもえの大乱戦になり、まさかの全滅。小鬼の余りの単純さに呆気にとられた。

ゴブリンの巣は首領の不信と野党からの嫉妬で構成されている。まだ見たことのない王(ロード)ならば話は別だろうが、概ね恐怖政治だ。そしてそこを刺激してやると、馬鹿な小鬼はすぐに手が出た。

その時は流れ弾の雷矢で死んでしまったが、手軽に巣を狩れるのでまた試してみるつもりだ。

他にも新入り(ルー)冒険者(キー)が巣穴の討伐に来れば、わざと身を晒して奇襲を悟らせたり、兎に角他のゴブリンを不幸にさせるような行動に意義を見いだしていた。

勿論、他のゴブリンやあるいは人に殺されることも多かったが。というかホブでさえない小鬼の時はほぼそれで終わる。

そんなことを繰り返しても相変わらず小鬼の生活に変化が見られないので、想像よりもこの世にはゴブリンが多いらしく、その繋がりも矮小らしい。

（さて、今回はどうしようかなぁ）

冒険者の槍に貫かれて絶命した後、何時ものように名も知れぬ母体から生まれでて早々に食事にありつきながら、そんなことを考えられるくらいには転生生活にも慣れきってしまった。

勿論死ぬのは嫌だし痛いのも嫌だが、どれほどの目に遭っても次があるとは、改めて考えると究極の保険である。どんな人生も送り放題だ。

尤も、小鬼限定という枷がある限り、数を重ねてもできることは高が知れているが。

ちなみに今食しているのは小鬼の肉片だ。やれお前の飯を寄越せと煩くて不愉快だったから衝動的に締め殺したが、うむ、不味いし固いし脂身もない。うぇ。

ただ殺すだけなのも勿体無いので喰ってみたら、まぁ不味いの何の。血抜きもしたら変わるだろうが、後で試してみるのも手か。

小鬼は基本的に雑食だ。人の食えるのなら大抵食える。なので同族の体も食おうと思わないだけで喰えない訳じゃない。肉盾が減ったら負担が増えるくらいの価値観は流石の小鬼でも備えているし、餓えた場合はわからないが、ただそうなる前に略奪に走るのが基本なのでやっぱり珍しいと思う。

他に餌があるのに仲間を貪り続ける姿に流石に驚く大人たちや怯える兄弟の顔が実に愉快だったので、暫く偏食を続けてみるのも面白いかもしれないと思った。

何も持たない小鬼は飯を手に入れるのだって楽じゃない。略奪を悪と理解できてしまう俺なら尚更だ。それに、これは人じゃない。人でなしの小鬼のガキだ。なら何も問題はない。

ひとしきり食い終わると、落ちていた石ころを拾い上げ、我先に逃げようとした愚鈍な奴を打ち殺す。

小鬼は経験で強くなる。同じステータスでも人生経験はコイツらとは段違いだ。ほら、ゴブリンはこうやって殺すんだぞ！こうだぞ！こうしちゃうぞ！

そうして小鬼転生者が食事と駆除を楽しんでいると、この巣の首領らしきシャーマンが喚きだした。呪文使いが率いているとなるとそこそこ中規模の巣だな。

「ＧＯＲＢＧＯＢＯ!!」

子供はいずれ戦力になるから最低限死なせないようにする程度の考えは小鬼にもある。餌を奪い合って殺し合いをするのはまぁ良いが、一匹が殺しすぎるのは問題に感じたようだ。

「ＧＯＲＢＧＯＢＯ・・・（ごめん、俺腹減ってたスマソ）」

別に反抗しても良かったが殺されるのも癪に触るので反省した振りをする。気が弱いが攻撃的な性格をしていると思わせれば、いずれ使える駒になると勝手に気に入られて殺されることはあまりない。

「ＧＯＲＢ・・・ＧＯＢＯＲ!!」

ついでに言うと悪知恵以外はあまり他の小鬼と変わらないので、適当におだててておけば気を良くして多少のヤンチャにも目をつむるパターンも多い。

おだてて褒めあげておけば気まぐれに指南するパターンはそれなりにあったし、新しい呪文を学べるかもしれない。そんな案もあり、思い付く限りの言葉と手振りで太鼓持ちをすると、面白いぐらいに効果が出る。

自分こそが誰よりも偉いと考える小鬼が、他者を敬うことなんて殆どない。配下が媚びへつらう事には馴れていても、実際に口に出して誉められるのは別なのかやたら機嫌が良くなる。

元気なのは良いことだが余り殺すなよ！首領はそう叱りつけて、ついでに側にいた孕み袋にされていた女性を蹴りあげる。

（あ、こいつ成長したら殺そう）

まだ助けられない。いや前と違って見ないふりはしないつもりだったが、普通よりは強いといっても小鬼の子供が、大規模な群れの巣穴のど真ん中で、しかもシャーマンとホブのふたりがいる場合となると流石に無計画すぎる。武器を渡したところで体力も残ってないだろうし、この人も死ぬだけだ。心苦しいがまだ耐えていてほしい。

運が良いのか用心棒も居るし、いつかやると決めていた殺っちゃいましょうよ！作戦

を再び試すのもアリか、なんて考えている彼は、人というよりは小鬼らしいのかもしれない。

結論から言うと殺っちゃいましょうよ！作戦は没になった。

小鬼転生者が成長しきる前に冒険者がやって来たのだ。女を犯しながら遊んでいた呪文使いの元に慌てた様子で見張り連中が駆け込んできた。虎視眈々と殺意を募らせていたため気づかなかったが、確かに少し金具の臭いがする。

どうやらたった一人で乗り込んできたらしいが、襲撃を退けた所かあの渡りも殺したらしい。ほへー、スッゴい。なんて感心したのは俺だけで、呪文使いは口汚くなく罵った後、生き残った連中を引き連れて追撃に向かった。まだ成長しきっていない俺は戦力になるか微妙だったのか、他の連中を隠しておけと命じられた。

頑張ってください！なんて激励をしながらもこれからの展開を考察する。単独で入ってきた冒険者は素人か否か、新入りだとして、田舎小鬼を殺せるほどの腕前ならあるいは。でも無傷という訳でもないだろうし、呪文使いの雷 矢でやられる確率も充分にある。あの腐れ首魁が死ねば万々歳だが、果たしてどちらに転ぶか分からない。うーん、悩む。

とそこまで考えて、転生者は急にアホらしくなった。何故今を考える必要があるの

か。今回は失敗した。だが俺には次がある！ならしたいことをすればいい！

彼はまだ体に合わない大きさの短刀（ナイフ）をゆらりと左右に振る。重さは外れているし、刃こぼれも酷いがまぁ刺せるし切れる。何も問題はない。

ゆっくりと振り返ると、きゅいきゅい騒ぎながら兄弟（ゴブリン）たちが隠れる場所を探していた。俺に頼るつもりなのか、その中のひとりが駆け寄ってくる。

可愛いもんじゃないか。ヘドが出る。知ってるぞ。お前が俺の食い残し（兄弟の肉）を嬉しそうに漁ってたのを。この悪魔が。

転生者は安心させるような笑顔を浮かべ、刃を突き刺した。

大人たちと比べたらあまりに感触がない。よりスカスカな肉の感触が気持ち悪い（気持ちいい）。

そのまま引き倒して腸を引き抜いてやった。後で女の人の鎖も解いてあげなくちゃな！あぁ！正義は素晴らしい！

今回は小鬼狩り（チャイルドハント）で逝ってみよう！

冒険者が洞窟の最奥に到着すると、彼は漠然とその場を見渡した。天然のものなのか、それとも掘り起こしたのか、その大空洞の由来は彼にはわからなかったが、ここが

小鬼(ゴブリン)どもの上位者のための空間であるのは間違いないようだった。

ただ、小鬼を殺すという目的のために訪れた彼にも理解できない何かが居た。

それは小鬼だ。血塗れの短刀(ナイフ)を握り、切り刻まれた小鬼の子供の血と臓物にまみれた異様な小鬼がいた。

汚濁にまみれた女もいた。鎖に繋がれたそれに、幼げな顔を凄惨な笑顔で染め上げ、今にも襲いかからんとしていた。彼にはそう見えた。

考えるよりも先に体が動いた。短刀を投機する刹那、此方を見る小鬼と目があった。

信じられなかった。刃が眼球から脳髄を貫通する間も、そいつは実に嬉しそうに笑っていた気がした。軽かったからか、派手に吹っ飛んだそれを確認する。顔面はグシャグシャになっていたが、やはりーー笑っていた。

かつて、何処かで同じ表情の小鬼を見たことがある気がする。

冒険者の彼は、無性に帰りたくなった。帰る場(故郷)はもう無いが、姉たちの待つ牧場には帰りたかった。

疲労もあるが、あの小鬼が、その眼の奥で渦巻く何かがーー怖かったから。

とある姉弟の話

その日の事は今でも忘れられない。
五年前、何時もと変わらない筈の夜に、私たちの故郷は滅びた。
闇夜に乗じて襲撃してきた小鬼たちが、我が物顔で故郷を襲ってきたのだ。
悲鳴と愉悦の鳴き声に叩き起こされた私は、何が起こったのか理解してしまった。村の中から悲鳴が上がるということは、夜警を突破してきたということ。
辺境の開拓村に都合よく腕利きの人物がいる訳もない。つまり、ここはまず滅びる。
「いい？何があっても決してここを動いては駄目よ？」
思い至った最悪の想像に身震いする間もなく、体が勝手に動いていた。　此方を不安そうに見つめる弟を宥め、床下に押し込める。
「姉さんは・・・」
「大丈夫よーーお姉ちゃんは大丈夫だから」
何が大丈夫なものか。でも、それでもできる事をするべきと思った。
弟だけでも逃がす。そう覚悟を決め、今にも雪崩れ込んでくるであろうゴブリンたち

を待ち構える。
耳障りな金切り声。暴力と略奪の悦びが嫌というほど込められたそれは、小賢しくも立て籠る獲物(自分たち)を攻め立てた。
今にも蹴破られそうなドアと向き合う。体の震えを必死に押さえる。
護る、自分がどうなっても、弟だけはーー
「GORBGOBO!!?」
その決意に届いたのは、肉が裂ける音と、愉悦の欠片もない苦痛にまみれた悲鳴だった。ぎゃあぎゃあと喚く小鬼たちの絶叫に、彼女は困惑する。
やがて悲鳴はやみ、限界を迎えていた扉が軋むように開けられた。
「ひっ・・・ッ」
そこには悪鬼がいた。脳髄の欠片がふんだんにまぶされた鍬を片手に、全身を傷と殺意でたぎらせた田舎小鬼(ホブゴブリン)が。
微かな灯りに照らされた体躯は、毒々しい緑の肌を自身のものも含めた鮮血で染め上げ、しかし目だけが爛々と輝いていた。
それは理性のようにも、狂気を宿しているようにも見える。
『まだヤられてないか、良かった』
その血濡れ小鬼(レッドキャップ)は此方を一別すると、聞いたこともない言葉で何かを呟く。

立ち尽くす自分をみて何処か安心したような調子（ニュアンス）が混じったそれに、酷く驚いたことを覚えている。

僅かな間に嫌というほど聞こえてきた小鬼のそれとは明らかに違う言語だった。

そいつはふと床下に目を移した。気づかれた！そう凍りつく彼女に気づいているのかいないのか、ただそこを指差すと急かすような仕草をする。まさか、隠れろと言いたいのか？小鬼が、只人を助ける？そんな馬鹿な!?

ありえない状況だが、相手の方も通じていないことは理解しているらしい。ただ苦笑しながら手にもった鍬を振り抜いた。

己に降り下ろされると思ったが、違った。

「ＧＯＲ!?」

『気づいてんだよ、バーカ』

背後から奇襲してきた仲間を打ち落とし、苦しむそれを踏み潰す。ぐしゃ、と肉と骨が潰れ、床を汚した。そいつは、その感触に嬉しそうに笑っていたように見えた。

仲間を平然と殺す姿に、やはり只人（じぶんたち）とは違うとはっきりとわかる。

それが伝（ええ）わったのか、小鬼に似つかわしくない寂しそうな表情をしたが、続けて聞こえてきた怒声に無表情になる。

仲間を殺されたゴブリンたちの不愉快な怒声が轟き、敵をＩＩ恐らくはこのホブを捜

してうろついているようだ。
それを察したのか、例の小鬼は何かを呟き（確か『ザンキオオスギマジクソゲー』だったか？）急かすようにして出ていった。
やがて外から凄まじい金切り声と争いの音が聞こえてきた。あの奇妙なホブが、他の小鬼と争っていることは明らかだった。
「姉さんッ!!」
想定外の事態にどうすればいいのか分からずにいると、隠れていた弟が隠れ場所から飛び出てきて、そのまま私をそのまま引きずり込んだ。驚いたが、鬼気迫る様子の表情に呑まれてなすがままにされてしまった。
気の弱い方だった弟が出した勇気に驚いたのを覚えてる。
幸いにもゴブリンたちは裏切り者に手一杯なのか、あれ以降は近づいて来なかった。あの個体が散らかしていった小鬼の残骸が匂いを隠していたかもしれないが。
ただ遠くから聞こえてくる悲鳴や怒声から、あの奇妙な個体が健闘しているらしいことだけは解った。
日常の何もかもが崩壊した。壊したのはゴブリンで、気まぐれかもしれないが、助けられたのもそのゴブリンだった。
二人はそのまま体を寄り添いあってじっと惨劇（イベント）が収まるのを待った。

糞尿を垂れ流し、土を食べ飢えを凌ぎ、ただ待ち続けた。
数分、数時間、やがて三日も経つと、只人のものも小鬼の悲鳴も聞こえなくなる。
限界に近くなった体を無理矢理に動かし、恐る恐る這い出て外を覗き込むと、村を蹂躙していた小鬼たちが肉塊となって転がっていた。
小さな村だ。隣人の夫婦や見知った知り合いも、無惨に放置されていたが。
空腹と疲労で痛む体にむち打ち、どうするべきか考える。帰りの馬車がないということは、ここがゴブリンの襲撃にあっていることは気づかれている。
知っていて、誰も来なかったのだ。達観していた姉はそう冷静に思考できた。
兎も角、街道にでればーー
「ＧＯＲＢＧＯＢＯ!!」
限界まで追い詰められていたからだろう。生き残りのゴブリンが接近していることに彼女は気づけなかった。
楽勝だった筈の襲撃がホブゴブリン（狂った奴）の裏切りで台無しになった。
仲間の殆どが殺されるか逃げるかして見事に取り残され、怒りつつ途方に暮れていたそのゴブリンは、まだ新鮮な、しかも襲いやすそうな相手を見つけて途端に上機嫌になった。
しかも、片方は女だ。小鬼の矮小な脳内で下卑た想像が駆け巡る。

男がいるのは残念だが、まだひ弱そうな子供だ。食いでが無さそうなのが残念だが、始末するのは容易いだろう。

仲間もあの裏切り者に殆ど殺されてしまったが、数が減ったということは取り分が増えるということだ。そう都合(ポジティブ)よく解釈し、此方に気付きもしない間抜けどもに飛びかかる。

直前で気づいたらしい雌が悲鳴をあげるが、間に合わない。馬鹿め、そう嘲ったゴブリンの無駄に高い鼻がへし折れた。

咄嗟に姉を突き飛ばし、地面に頭から激突した小鬼は痛みでわめいていた。途端に殺意が膨れ上がり、考える前に体が動いていた。

弟が石を拾い上げ、ゴブリンに上乗りになり殴打し続ける様子を姉は呆然と見ていた。幼い彼は疲労も限界まで貯まっているだろうに、激情がそれを無視して体を動かしていた。

糞ッ！糞ッ！ちくしょうッ！全てが憎くて、そんな悪態を口にする暇も惜しい。何も悪いことをしていないのに、家族(姉)を壊そうとして、隣人を殺し尽くして、その上まだ奪おうとするゴブリンが憎かった。そして誰も助けにきてくれなかったどうしようもない現実が憎くて憎くて堪らなかった。彼はその全てを暴力に変換していた。

肉を殴打する音がやがて土を削る音に変わるまで腕を動かし、遂に限界を迎えたのか

弟は残骸に覆い被さるように気絶した。

「やるじゃねェか、ガキ」

慌てて駆け寄ろうとする姉の背後から、見知らぬ人物の共通語が聞こえてきた。振り替えると、小柄な人影がいた。

一瞬小鬼かと思ったが、それは一人の老圃人（レーア）だった。

「はッ、こりゃまた、根性のあるガキがいたもんだなァ」

感心したように呟くと、じろりと此方を一別する。小鬼に負けず劣らずな醜悪な顔だったが、そこには祈る者（プレイヤー）としての理性が確かに見てとれた。

信じられない事に、これほどの襲撃でも生き残りは僅かだが居る。歩ける奴は街道方面に先導（エスコート）したと、老圃人は淡々と語った。

「小鬼どもがどいつもこいつも死に絶えてやがる。あッちでおッ死んでやがる田舎小鬼（ホブ）の仕業かァ？　たく、一体どんな賽の目が出たんだかわかりゃしねェな」

不思議そうに語る老圃人を省みるに、あの奇怪なゴブリンは死んだらしい。去る際の小鬼らしくない表情が思い浮かぶ。

アレが果たして何を考えて事を起こしたのかは、今となっては分からなくなった。

「ともあれ見込みがあるかもしれねェ…おい、アンタ。コイツは暫く預からせてもらおう」

信じがたいことに、失神（スタン）する弟を連れ去ろうとする老圃人に堪らずすがり付く。また家族が消えるなんて嫌だ！勝手なことをしないで！そう訴えたが、しかし聞く耳なんて持ってはくれなかった。

「何時か返す。」それだけ告げ、老圃人は弟をつれて消えた。

それからは、よく覚えていない。茫然自失のまま、気づけば保護されていた。

偶然にも襲撃（レイズ）の前日に街に行き、難を逃れた隣人の子が居た。彼女の叔父の牧場に世話になり、ただ生きていた。

あの老圃人の言葉を信じ、また弟と会えることを希望にして生き続けた。

やがて成長し、小鬼殺し（ゴブリンスレイヤー）の道へと歩み始めた弟と再会したのは、それから五年もの歳月が経ってからだった。

とある群れの終わり

小鬼転生者は飽いていた。基本的に小鬼の社会というのは寝るか食うか襲うか犯すかしかない。そんな生産性の欠片もない連中を不幸にするのは至上の喜びと言っても過言ではないが、それを何百と繰り返すと何というか、飽きてくる。

小鬼という奴らは変化がない。それ以外で変わった事と言えば、ちょっとした死亡例（バリエーション）が増えたことぐらいか。

山火事か何かで煙に巻かれて死んだり、川の氾濫でも起こったのか洞窟に雪崩れ込んできた水で溺死したり、洞窟（マイホーム）が突然崩落して生き埋めになるなんて変わった死に方（パターン）がここ最近妙に増えてきた気がする。

何とも不運なことだが、数えるのも億劫になるほどやり直（リスポーン）していれば、そういうこともあるものだ。・・・多分。

それにしたってただ死んだだけだし、特に何かが劇的に変わった訳じゃない。

自分の行いで何かが変わると思っていたからかもしれない。何か成し遂げられると奢っていたのかもしれない。

例えそんな大それたことを思わなくとも、現在進行形で己の行為が何一つ成果として形にならないというのは虚しいものだ。

殺しても逃がしても助けても何も変わらずゴブリンどもは加虐を謳歌し、助けた相手は此方に敵意を向ける。流石に拘束を解いた女の子(孕み袋)に石で撲殺されたり後ろから何度も刺されたりするとへこむ。虚しい。

小鬼が小鬼を殺す何て珍しくもなく、そこに物語(ストーリー)はない。ただ脇に埋もれて消えていくだけ。

結局のところ、小鬼の生死なんてとるに足りない出来事に過ぎないのだ。死ぬときは死ぬし、生きるときは生きているだけ。そこに意味なんてない。

しかし、どうにもただの小鬼として出来ることはやり尽くしてしまった。

死んで覚える。これで出来ることが意外と少ない。

必死に冒険者の剣術を盗み覚えても、体が覚えるとは良くいったもので、どれだけ観察しても死亡したらはいそれまで。やり直し(リスタート)となる。

呪文などは拙い記憶力をフル活用して覚えることで幾つかは修得した。肝心の発動に関しては呪文使い(シャーマン)になるだけの経験値(レベリング)が必要だが。

他の成果と言えるものは、薬草の煎じ方や毒物の扱いが上手くなったり、仲間(バカ)の調子の乗らせ方が上達した事くらいか。

あいつら単純だからおだてるのはそう難しくない。対人よりは楽だ。行動の基準が強い弱い愉しい愉しくないしかないし、駆け引き上等な心理戦とは無縁だし。

今回は久しぶりに条件に当てはまる巣穴に産まれたので、内部崩壊させて遊ぶことにした。殺っちゃいましょう！作戦である。

一致団結という言葉をゴブリンを知らない。そんな連中がなぜ群れるのかというと、数が多いと色々と楽だから。それに尽きる。

頭数が多ければ襲撃の際には獲物を襲いやすいし、いざというときには盾になる。危なくなったら囮にして自分だけでも逃げりゃいい。といった邪悪で短絡的な目的で数を増やそうとする。実に浅ましい。

どれだけ小鬼転生者（ゴブリンリターネイション）としての経験（キャリア）を積んでも、損得抜きの仲間意識のある連中に巡り会ったことがないのを省みるに、それが全小鬼の共通認識と言っても差し支えないだろう。

呪文使（シャーマン）いの支配する群れの場合、それが特に顕著だ。呪文という強大な力（ステータス）と悪知恵で部下を支配している。その点は他の上位種と変わらない。

ただ、小鬼英雄（チャンピオン）や田舎小鬼（ホブ）が頭目だと、不平不満がそれこそ湯水のごとく溢れるものの、どれだけ煽っても反乱には至らなかった。

体がでかいというのはどうにも視覚的に分かりやすいからか、コイツには敵わないと

馬鹿でも思うらしい。

しかし呪文使いの体格は平均的な小鬼とそう変わらない。だから呪文抜きだと基本的に侮られる傾向にある。

だからこそ、呪文（スペル）が有限だと教えてやると実に簡単に行動に移す。

経験のある渡りなら話は別だろうが、ただの小鬼なら、『何？あの偉そうな奴は実は一日に少ししか呪文を使えないだって？　なら使ったときを狙えば楽勝じゃないか！』といった具合になるからだ。

しかし実に馬鹿だな、小鬼って。

「ＧＯＲＢＹ・・・ＧＯＲＧ、ＯＲＢ!!?」

冒険者を相手に呪文を使い果たし、勝利の余韻に浸っていた首魁（バカ）を袋叩きにする、そんな生き残りの反乱者たちを後ろから観察する転生者。してやったりという顔をしているものの、どこか不満げだ。

日頃から余裕綽々で威張り散らしていた奴が、信じられないといった風に喚く姿が実に愉快だったが、これも少し飽きてきた。

小鬼という奴らはどいつもこいつも単純で、策が嵌まりすぎてどうにも面白くない。

勇猛さと無縁で臆病な小鬼は、必然的に上下関係は絶対だ。ただ、一度でも自分より下だと思った相手はたちまち餌食にする。それが事実か勘違いかは問わないだけだ。

当たり前だが自分の切り札を詳細に語る程の間抜けな首魁は流石に居ない。呪文が本当に使いきられているのかは知らなかったが、今回は当たりだったようだ。

まぁ、多くて一日に2回か3回なので山勘を外すことは余りないのだが。

挽き肉（ミンチ）にされた首魁を囲み、大喜びしている連中の一人にそっと囁く。凄いですね！きっと貴方が次の長です！さっそく権威を示しましょう！といった適当な内容で。

そうすると鵜呑みにした馬鹿が忽ち偉そうに他の面子に高圧的になる。そしたら別の奴に同じように・・・ということを数回繰り返すと、下克上で血のたぎっていた小鬼どもはもう止まらない。血で血を洗う第二回戦の始まりだ。

巻き込まれないように隅によって観戦する。

こういう場合、どういった立ち位置なら割を食わないのかはとっくに学んだ。

野次を飛ばしたくなったが、そうすると途端にむかつく（オレ）奴に矛先が向く。そういう時には団結する小賢しさが実に腹立たしい。

しかし、汚く罵り合いながら仲間同士で取っ組み合う姿は、分かりきっていたが浅ましく醜い。さっきまで手を取り合ってリンチしてたろうに、清々しい手のひら返しだ。

噂に聞く王（ロード）とは、どうやってこんな自己中心の塊を大勢従えられるのか気になった。自分よりでかい体躯の上位種も従うのか否か、そして多少は他の小鬼との違いのある性格なのか。できれば面白味のある方であってくれと切に願う。小鬼風情に期待しても

無駄だろうが、願うのはタダだ。

「ＧＯＲＢＲＹ!!」

そんな事を考えている内に試合は終わってしまったらしい。

血塗れで動かない奴らを足蹴に勝鬨をあげる優勝者を見る。

満身創痍だが、長となった優越感と気持ちのいい勝利感で満ち溢れた様子で、外野のことなどすっかり忘却してしまったらしい。

真っ先に武器を手に取り争奪戦に挑んだ奴だ。非力な小鬼同士の闘いなど泥仕合が当たり前だが、どうやら残忍さと容赦のなさで勝ちを納めたようだ。上位種になる素質のありそうな小鬼だな。生意気で気に入らない。

戦利品のつもりなのか、呪文使いの遺品である触媒の杖を掲げ、意気揚々とする勝利者の姿に失笑を禁じ得ない。

生き残りが俺を含めて二人で、しかも冒険者が目をつけた巣穴を得たところでどうするつもりなのか聞いてみたいが、どうせ何も考えていないだろうし、今のうちに処分することに決めた。

地面に転がっていた粗雑な棍棒を持ち上げ、隙だらけの頭部を全力で殴打する。ぐぎゃと鳴いて地面に倒れた隙に馬乗りになり、手早く止めを刺した。疲労困憊の小鬼と元気満点の小鬼では元気な方が強い。はっきりわかんだね。

何か勝ち誇ってた顔がムカついたので原型をとどめないくらいグシャグシャに殴り潰してから一息つく。すっきり！

奇襲への罪悪感など欠片もない。これは弱いもの虐めではなく悪いもの虐めなのだ。つまり、全てが正義だ。なんつって。

『おっ、きたきた！メーシーウーマー!!』

途端に妙に体に力がみなぎってきた。この感覚は渡りになった時にも感じる。経験を積み体が進化（レベルアップ）でもしたみたいだ。心なしか少し力が強くなった気がする。

魔法しかり奇跡しかり、本当にＲＰＧみたいな世界である。さて、これからどうしようか。田舎小鬼になる方が色々と楽だが、久しぶりに呪文使いになるのも良い。どんな性能（ビルド）にするか頭を悩ませていると、突然脳裏で閃いた。

田舎者はでかいが腕力だけでは限界がある。呪文使いは強力だが素の力が弱い。なら、体がでかくて呪文が使える上位種が居たとしたら最強なのではないか。

そう思い至った小鬼転生者は、呪文使いの使っていた触媒を回収する。

ついでに死んだ冒険者たちの装備も何か使えるものがないか漁ってみたが、小鬼に返り討ちにあった程度の新入り（ルーキー）が大層なものを用意している訳がなく、少量の回復薬（ポーション）と少しの食料、そして中身の寂しい財布しか無かった。とりあえず長剣（ロングソード）は体躯（サイズ）的に持てないので、小物入れ（ポーチ）だけ頂戴することにした。

できれば衣類が欲しかったが、流石に死人を全裸にするのは駄目だしそもそも小鬼のサイズには合わない。なので布だけ頂戴した。

こういった死体漁り（スカベンジ）に思うところはある。しかし死人に物は使えない。ここに放置するよりは有意義に使うから許してほしい。そう亡骸に手を合わせて黙祷する。

さて、当面は魔法戦士（マジックソルジャー）でも目指してみるか。

呪文使いになった後に体を鍛えたらそうなれるかもしれない。どうせ失敗しても次があるのだ。やってみよう！

でもその前に、女の子を助けないとね！

囚われていた村娘は絶望に沈んでいた。小鬼たちに拐われ、その心は終わりのない凌辱に当にどん底だったが、突如騒ぎ始めた小鬼たちの様子に助けがきたと束の間の希望を抱いた。

きっと村が依頼を出したのだろう。収穫前で蓄えも少なく、厳しい懐事情で負担を強いるのは酷だが、この地獄から救い出されるのならなんだって償うつもりだった。出稼ぎで奉公に出されたとしても、小鬼を相手にするよりは何倍もましだった。

息を潜めて待ち、やがて暗がりから現れたのは、待ち望んだ冒険者（レスキュー）ではなく小鬼だった。

松明に照らされた醜悪な顔に、村娘の微かな希望は打ち砕かれた。

「あっ・・・あぁ・・・は、あはは、・・・・」

また続くのか、あの行為が。死ぬまで、ずっと。そう考えると、心が悲鳴をあげる。助かるかもしれないという希望が潰え、彼女の心は今度こそ死んだ。

突如笑い始め、そして沈黙した村娘に面食らった転生者は、そうなった原因が自分だと気づいた。

一応毎日飯を食わせたり洗ってやったり世話はしていたんだけどなぁ。まぁ小鬼の区別なんてつかないだろうししょうがないか。

レイプ目で沈黙する女の子にさてどうするか困り果てる。とりあえずできるだけ安心させるよう笑顔を浮かべた。

小鬼の顔だとどんな表情をしても怯えさせてしまう事実はこの際無視する。

『・・・大丈夫ですよー。俺なにもしないよー』

「・・・・」

『・・・』

むらむすめにはこうかはなかった！

残念だが仕方がない。どうせ感謝なんて期待してなかった。そう言い訳しつつ村娘を拘束していた荒縄を切断する。自由になったのに動こうとしない姿に溜め息をつき、

とりあえず事後で汚れた体を拭いてあげることにした。

『ほら、綺麗になったよー。もう大丈夫だよー』

「……」

『これ、ポーション。お腹減ってるでしょ？　乾し肉もあるよ』

女の子を助ける英雄的な気分に浸りながら、体を拭いて食事をさせる。

最近はよく死ぬのでこういうのはあまり得意ではないが、それでも無視できないのが人間である筈だ。

暴行による衰弱が酷かったので回復薬も飲ませておく。勿体無くはないが、どうせ死ねば持ち越せない代物だ。次のない彼女にこそ使うべきだろう。

それでも反応しない村娘だが、しょうがないので放置することにした。

田舎者なら担げるだろうが、今の肉体では無理だ。

冒険者が帰らなければ後続がくるだろうし、そのうち助けが来る。群れの備蓄に使えそうなものがないか漁りながら、そう己を慰める。出来ることはやったさ。俺は正しい。うん。

『じゃあ、お元気で』

返答はなかった。少しだけ虚しくなった。

レッドキャップ・ハンティング

緑の月明かりに照らされた夜。日が落ち、秩序が寝静まった時間は混沌に属するものが動き出す。日常は何も秩序の特権ではないのだ。

「GOR、GBGO、GBO!!」

そんなある晩、一匹の小鬼が森を駆けていた。足を必死に動かし、息も絶え絶えといった様子だが、絶対に立ち止まろうとはしない。時おり背後を振り返り、追ってくるであろう何かに酷く怯えていた。

何故、どうしてこうなった！そう悲観する小鬼に、恐らく死に絶えたであろう仲間たちの事は欠片も残されていない。奴等は肉盾にもならなかった糞だとしか思っていなかった。日頃偉そうにふんぞり返っていた首領（ホブ）すら、何の役にも立たず殺されてしまった。

始まりはその小鬼の巣穴に風変わりな渡りがやって来た事だ。肉厚な大斧（アクス）と杖を携え、只人の木こりのような服と鉄の長靴を履き、赤錆色（レッド）のとんがり帽子（キャップ）を被った一回り

大きな体躯の呪文使い（シャーマン）だった。

そいつは首領の田舎者（ホブ）に早々に挨拶すると、この群れの用心棒にして欲しいと申し出てきた。

田舎者（ホブ）ならともかく、群れの長に収まる呪文使いが用心棒になりたがるのは稀だ。首魁は最初群れを乗っとるつもりかと警戒していたが、呪文使いの下手な態度と持参してきた果実（フルーツ）を献上されて気をよくして快諾した。

手下は多いが脆い。忌々しい冒険者によって数を減らされる事を考えると、使える駒は多いほど良い。それに、渡りを繰り返し冒険者とも戦って生き残ってきたホブは、己の実力に自信を持っていた。

首に下げられた冒険者の認識表（タグ）がその証であり、象徴と言っていい。

呪文は長ったらしく言葉を唱える必要があるし、発動に時間がかかることは経験で知っていた。この渡りが妙なことを考えていたとしても、呪文を使われる前に捻り潰す自信も充分にあった。

捕まえていた孕み袋をあてがってやろうとしたら断ってきたのも妙だったが、慢心からその違和感に気づきもしない。

献上された新鮮な果実にかぶりつき、熟れた果肉の旨さと増えた仲間（手駒）に喜ぶホブだったが、それはとんでもない勘違いだった。

暫くすると急に体に異変が起こった。

「・・・ＧＯＲＢ？」

腹を満たし、さて孕み袋で遊ぶかと立ち上がろうとしたら妙に体の動きが鈍い。それに目が霞む。手先も震えていた。

毒を盛られた！そう気づく時にはもう遅く、呪文使いが詠唱を終えていた。

杖から放出され、巣穴に蔓延する眠雲（スリープ）。狭い洞窟に充満するそれを吸い込み、手下の小鬼が痙攣して倒れる。

運（ダイス）が良かったのか、首魁のみ意識を繋いでいた。

役立たずのチビどもが！呑気にいびきをかく手下を罵倒しようとしたが、舌が痺れて声が出せない。

やり場のない怒りに任せ、此方を嫌らしい笑みで見つめる呪文使いに飛びかかるが、毒で麻痺した動きは容易くかわされた。

無様に転がる首魁が最後に見た光景は、呪文使いにあるまじき腕力で降り下ろされる肉厚な斧の刃だった。

命じられた見張りに飽いた当番は、仕事を早々に切り上げた。通した渡りが持参してきた果物を食べてから妙に体が怠いし、ありつけなかった相棒がごねて煩わしかったからだ。

そんな彼らが巣穴の奥に戻ってきた時に目にしたのは、転がる首を踏み潰す呪文使いの姿だった。

凄惨な笑みを浮かべ、無言で斧を降り下ろす姿に驚いたが、「あぁ、首魁（でかぶつ）を殺して長になったのか」と中毒で霞んだ頭で呑気に近づく。

呪文使いは早々にその間抜けの頭を斧で砕き、躯を蹴り飛ばす。

そして漫然とした動作で固まっていた片割れに視線を向けた。

「・・・G、GBR？」

炙れて果実にありつけなかったその小鬼は、正常に働く頭で、この異様な状況が己の不利にしかならないことを悟っていた。

そしてこの呪文使いが、騙し討ちで群れを乗っとるどころかもっと邪悪なことを考えていたんだと、その目を見れば嫌でもわかる。

『どうした？そんな顔して、嗤えよほら　仲間（間抜け）が死んだら、いつだって小鬼はそうするじゃないか』

自分達と違う言葉で囁き、斧で亡骸を弄くり回す呪文使い。その視線は片時も此方を外さず、嗤っていた。

唯一の生存者（サバイバー）となったゴブリンは、果たして本当にこいつが俺たち（ゴブリン）と同じなのか解らなくなった。

殺すのが愉しいのはわかる。弱者を痛め付けて滑稽に泣きわめく姿は心が踊るし、自分達（ゴブリン）より劣っていると見下せる。

同族を殺すのもわかる。群れを乗っとるためならそうする上位種は大勢いる。

でも何故、俺たちまで殺し尽くす！群れが欲しい訳じゃないのか。ワザワザ毒の果実まで用意したのに、どういう意味があってこんな事をしたのかが理解できない。

理解できぬ物を人は恐れる。小鬼もしかり。

恐怖と困惑で答えぬ姿勢に飽いたのか、呪文使いが一歩、此方に足を動かす。べちゃり、と同胞の血が滴るも気にする素振りはない。

そこでようやく生存本能が恐怖を上回った。

ふざけるな、冗談じゃない。こんな所でこんな訳のわからない奴に殺されてたまるか！

手に持っていた粗雑な槍を呪文使いに放り投げる。自分じゃ勝てないし、少しでも時間稼ぎになれば。そんな高等な策があった訳ではないが、煩わしげに叩き落とした呪文使いを尻目に、脇目も振らず一目散に逃走する。

『おぉう良いねェ!!鬼ごっこ!!俺が鬼でお前は獲物な！　いやどっちも小鬼か!!　ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!!』

言葉は分からずとも、背後から木霊するそれが悪意に満ちたものであるとはわかる。

余裕をもって追いかけてくるそれに、小鬼は必死に足を動かして少しでも遠ざかろうとした。

洞窟を飛び出し、森を駆け抜け、体力の続く限り走り続けた小鬼は限界を迎えた。

「ＧＯＲ・・・、ＧＢＧ・・・、・・・ＧＯＲＹ!!」

ぜぇぜぇと息をつき、後ろを振り返る。奴はーー居ない！足跡も自分の分しかない！

居ってきていない！やったぞ！撒けたんだ！俺は生き残った！

あぁ、腹が減った。喉が乾いて死にそうだ。水が飲みたい。

疲労と安堵から膝から倒れ落ちた小鬼は、仰向けの姿勢で体を休める。

『ドーモ、ゴブリン＝サン！　私メリーサン！今あなたの真上に要るの！』

居た。呪文使いが、木々の高みからじっと此方を見下ろしていた。

ゴブリンは奇襲することは慣れていても、奇襲される事にはなれていない。思い浮かびもしなかった木々の上からの追跡に、その小鬼はまんまと翻弄されていただけだっ

た。

まんまと翻弄されていただけだった。

慌てて立ち上がろうともたつく小鬼を愉快げに見下ろし、呪文使いは敏捷な動きで重力に委せるままに飛び降りる。着地点は、言わずもながその小鬼であった。

「ＧＯＢ!!」

小鬼は鉄の靴底で、自らの内蔵と脳髄を踏み尽くされる感触を感じていた。そのまま塵のように死に、こうしてひとつの群れが滅ぼされた。

趣味の小鬼狩り（ゴブリンハント）を終えた呪文使いーー小鬼転生者は、始末した小鬼の纏っていたぼろ布を剥ぎ取ると、優雅に斧の血糊を拭っていた。こういう手間を惜しむとすぐに刃がなまくらになる。折角手に入れたものだし、そこらの小鬼じゃあるまいし雑に扱って駄目にするなんてアホな真似はしない。

この斧は鉱人の冒険者が使っていた武器だ。上位種になるため、あっちこっちの巣穴を渡り歩いているうちに手に入れた。

小鬼らしく卑劣な策で持ち主（ドワーフ）の一党を返り討ちにし、見せびらかして偉そうにしていた田舎小鬼（ホブ）をぶっ殺（アンブッシュ）した時に頂戴したが、さすが冒険者の武器。小鬼の扱う粗雑な石斧とは物がちがう。良く切れるし叩き潰すのにも向いている。ちゅよい。

近接にも強いでっかい呪文使い。そんな育成方針（コンセプト）でしばし武者修行として放浪していたが、それは成功したと言っていいだろう。久しぶりの成果に血が沸き立ち、発散のために犠牲になって貰った小鬼どもには感謝してやらんこともない。

時には逃げ、時にはそこそこの相手と戦い、死なない程度に渡りを繰り返すとそこらの呪文使いよりは断然強く育った。勿論、手練れの冒険者には及ばないが。

ここまで来るのにも相応の苦労が伴ったが、それも良しとしよう。ああ、強いとは素晴らしい！

ちなみにこのとんがり帽子と服は廃村から回収した物だ。帽子に関しては元は違う色だったが、返り血を落とすのをサボったらそのまま染まってしまったので放置したらこうなった。何故か気に入ったのでそのまま使っている。

辺境の開拓村は小鬼に襲撃されやすく、棄てられた所も探せば無いことはない。そんな忘れられた場所（ロストステージ）を探索するのが最近の流行（マイブーム）りだ。

他の呪文使いが威圧感を演出するためにお洒落（ファッション）に気を使うのを参考にしてみた。

いやー、やはり上位種になると余裕が出てくる。使い捨てられるか駆除されるかで忙しいただの小鬼だとこうはいかない。

ふんふん、らんらん、適当な鼻唄を歌いながら小鬼の死骸を回収する。

放置しても良かったが、見知らぬ獣や虫の餌にするのも勿体無い。なので巣穴に持ち

帰って解体するつもりだ。

生きている間は糞そのものの小鬼でも、死ねば使い道はある。具体的には食料とか。皮を鞣して使えるかも試してみたかった。

同胞の亡骸を引き摺りながら帰路につく赤帽子（レッドキャップ）は、果たして人の心をもつ小鬼なのか、それとも小鬼になった人なのか、それを判別する者はここには居なかった。

初遭遇（ファーストコンタクト）（大嘘）

辺境の街、その一角にある冒険者ギルドでは、冒険者たちが日々の糧を得るために、あるいは英雄譚を夢見て活気づいていた。

「ゴブリンだ」

そこに彼が来た。一見みすぼらしく見える全身鎧に、小振りな剣と盾を携えた冒険者。避けられがちなゴブリン退治を受け続ける変わり者。自らを小鬼殺（ゴブリンスレイヤー）しと称するその冒険者は、何時ものように窓口に赴くと平坦な声で依頼を催促する。勿論、求めるのはゴブリン退治だ。

「おいおいまたかよ・・・あいつもうずっとゴブリンばっかだぜ」

「ほっとけ・・・ああいうのと関わるもんじゃない」

そんな物珍しそうな遠巻きの視線に目もくれず、その予想通りの内容に、しかしギルドの受付嬢は申し訳なさそうに応じる。

「・・・えっと、申し訳ないです。今日は承っていないですね」

秩序の民にとって最も身近な脅威が小鬼であり、その被害は尽きぬことはない。

只人が失敗すれば一匹沸いてくると揶揄されるほど数が多いゴブリンは、貧しい村には脅威だ。備蓄や家畜が盗まれるのは日常茶判事で、娘がさらわれるのも良くある筈。

だというのに、最近はその討伐依頼が妙に少ない。ここら一帯の小鬼の被害が奇妙なほど少なくなっているからだ。

「・・・またか」

理由は単純、小鬼が減ったから。

最近は、新人の冒険者が意気揚々と依頼を受けて、いざ討伐に赴くと何故か全滅していたという奇妙な例が多い。

「例の奇行小鬼（ゴブリンストレンジ）が異常発生でもしてるんですかね？　いや勿論、ゴブリン案件なんて減ってくれた方が良いんですけど・・・」

奇行小鬼（ゴブリンストレンジ）。読んで字のごとく、奇妙な個体の小鬼である。

ここ数年、ここら一帯の辺境では少数ながら奇行種の小鬼が観測されていた。

新種の上位種という訳ではなく、眉唾ながら通常の小鬼とは異なる言葉を話し、そして極めて奇妙なことに捕虜となった女性を逃がしたり、丁寧に世話もされたなんて噂もある。

流石にそれに関しては尾ひれのついた見間違えだろうが、どうにも精神に異常をきたした個体は一定数存在するらしく、群れの仲間を皆殺しにしたり壊滅させる行動をとっ

ているらしい。冒険者の前で首を吊ったり自殺したりする個体すら居るという。
ゴブリンスレイヤーの報告以外にも複数の冒険者から目撃情報の寄せられたその小鬼は、新人たちに楽に思われがちなゴブリン退治をさらに簡単にしてくれる幸運小鬼（ラッキーゴブリン）なんて語られている。
危険だ。小鬼殺しはそう主張する。ゴブリン退治は決して簡単ではない。それに、考えの読めない小鬼は非常に恐ろしいと。
最も、奇行小鬼はあっさり討伐される例が非常に多いので、その反応も仕方なかった。
不満げなゴブリンスレイヤーに、受付嬢がそういえば・・・と、隅に放置されていた依頼を紹介する。ゴブリン関連の案件だし、まさに彼にぴったりの物だろう。
「あっ、でもひとつだけゴブリン関連のものがありました！　・・・討伐の依頼じゃなくて調査ですね。西の廃村付近で小鬼の目撃情報があったらしく、調査と討伐の依頼が出されています」
「規模は？」
「うーん、ちょっとわからないですね。依頼主の管理人さんもはっきりとは見ていないらしいですし」
「廃村と言ったな。はぐれの小鬼が群れで住み着くかもしれん。放置するのは危険だ」
ゴブリンならば問題ない。そこに小鬼がいるのなら、何者だろうと関係ない。ゴブリ

ンは全て殺す。

そんな小鬼殺しを、受付嬢は曖昧な笑みで見送った。

時間は夕方。ゴブリンにとっての早朝である。この時間は連中の警戒が鈍る。それを彼は経験で知っていた。

道中は特に問題なく、たどり着いたのは打ち捨てられ、朽ちていくばかりの廃村である。雑草が生い茂り、手入れのされていない柵は朽ちかけだった。完全に無人となり、打ち壊された家々や家具の様子に、ここが捨てられた場所だというのが嫌というほど実感できる。

まるで、自身の故郷のように。兜の奥で言い知れぬ感情を噛み締めながら、しかし彼は警戒を一層高めた。

見張りも居ない、小鬼一匹見かけない。罠を仕掛けられた様子もない。

しかし、目的地について草々に、ゴブリンスレイヤーは、異様なものを発見した。

小鬼だ。生者ではない。小鬼の骨と皮を繋ぎあわせた醜悪なトーテムが設置され、その下には眼孔に枝を突き刺し、串刺しにされ滑稽な形に飾り立てられた頭部が並べられていた。

飛び交う蝿と沸き出す蛆虫が、見るもの全てにそのトーテムを一層醜悪（グロテスク）に演出していた。

（呪文使いか・・・しかし、これは・・・）

ゴブリンは生来から悪辣だ。トーテムを作るのは呪文使いの習性である。それは、わかる。

だが、それでもこれほど同族への悪意に満ちた代物は初めてだった。

このトーテム全体から『楽しんで作りました』という製作者の感情が見え透いてくる。

呪文使いとなると群れを率いている。しかし、同族をこうも惨殺するタイプの敵は初めてだ。見張りもいないのなら単独の可能性もある。判断がつかない。未知は敵だ。考えろ。

そうして暫し考え込んで出した結論は、ともあれ、情報が必要といったものだった。知らないのなら、調べればいい。

臭い消しは万全だ。最初の洞窟での失敗のように悟られることもないし、まだ時間に猶予はある。

洞窟と違って広いここなら、小鬼が隠れられる場所は多いが、逆に逃げ込める場所が此方にもあるということだ。後ろからの挟み撃ちの心配もない。

学び、次にいかす。それをするために斥候を続ける彼を、じっと窺う視線には気づかなかった。

やがて、この村に住み着く小鬼が使っていたであろう焚き火を見つけた。この場所で

一番家の体をなしていた廃墟に足を踏み入れると、確かに何者かが生活していた痕跡があった。

屋内は妙に小綺麗に整頓され、埃やゴミが一ヶ所に纏められている。藁を敷き詰めた粗末な寝台もあつらえられているし、その様子は小鬼が使っていた処とは思えないが、ここまで調べていく内に一貫してわかったことがある。それは、この場合では常識など宛にならないことだ。

釜戸で灰となった薪の上に、雑に切り落とされた肉片が蔓で縛られ、吊るされていた。燻して干し肉にでもするつもりだったのか。小鬼が、保存食を作る発想を持つ。単純だが、その恐ろしさを理解できない筈がない。

緑の肌の切れっぱしから、それがゴブリンのものであることはわかる。どれもこれも、小鬼だ。ここの主は小鬼の死骸で遊んでいる。そして、食っていた。

燃え残りを確かめる。まだ暖かい。少し前まで確かに使われていたものだ。使っていたらしい赤錆だらけの鍋を開けてみると、食べかけの雑炊が鍋底にこびりついていた。

雑草と穀物を煮たそれに、味付けのつもりなのか、生皮を剥いだ小鬼の頭部がすっぽりと収まっていた。

小ぶりなそれは明らかに幼体のもので、溶けた眼球がこちらを見ていた気がした。

ただひたすらに胸糞悪い。音をたてないように蓋を閉じる傍らに、撤退を視野にいれる。言い知れぬ不安が沸き上がるのもあるが、幾らなんでも得体が知れなさすぎる。

巣をここまで漁ってまだ一匹も見かけないのなら、冒険者の気配を察して立ち去っているのかもしれない。

様子をうかがい、戻ってくるのならば焼き討ちして炙り出す。若しくは井戸に毒でも仕込んでおくか。

訪れた痕跡を消し、頭の中で未知の小鬼を駆逐する策を巡らしながら廃墟を出る。

「コーー」

壊れかけのドアを潜り抜けた瞬間、頭上から声が聞こえた。

思考より先に体が動く。機敏な動作で地面を蹴りあげると、転がるようにして距離を稼ぎ、衝撃に備える。

しかし、こない。攻撃も、呪文の詠唱も無かった。

視線の先、廃墟の屋根に陣取った呪文使いは、ただじっと彼を見下ろす。

赤錆色のとんがり帽子を被り、斧と杖を携えた呪文使い。姿形も個体も違うのに、その表情は、何処かで見たことのあるそれで。

領域を荒らされた者が浮かべる恐怖でも、怒りでも、殺意でもない感情。

彼の脳裏に、幾つかの始末してきた小鬼の顔が思い浮かぶ。殺した筈のそれらが、ま

るで蘇ったかのような錯覚を覚えた。
双方が見下ろし見下ろされる奇妙な硬直状態は、ふいに破られる。
相対する赤帽子（レッドキャップ）は、醜い顔を不気味に歪ませて口を開く。紡がれるのは呪詛ではない。

「ーーーこ、ーーーコンニーーーチ、ハァ」
聞きなれた小鬼のそれではなく、その口から出たのは酷く聞き取りづらい共通語の挨拶だった。瞬間、兜の奥でうなじが逆立つ。
共通語を話す小鬼の存在に、ではない。その言葉に正真正銘の歓迎の意があることを察したからだ。偽りだとしても、それを隠すという高等な行為をゴブリンはしない。
ゴブリンというのは愚か者の代名詞だが、それゆえに分かりやすい。こいつはゴブリンだ。間違いない。だが、その考えが全くわからないのは初めての事だった。